一方ならず、沈み勝ちの御氣しきを、見て、清盛心憂く思へば、隨て院の御側に伺候する人も稀れなるに猶更忍び兼ねさせ給ひ、或月の夜に仲國を御傍近く召されて、小督は、此頃嵯峨野の邊りに在りと云へば索め來よとの御諚に仲國は畏まりて察の御馬に乘りて直ちに出向きたれど、家の名も、所の程も定かに分らず、されど此月の夜には小督は例の琴を彈くならんとて、そを便りに戸毎に、覗ひけれども、更に嵯峨には、其れと思ぼしき家もなし、ゆきゆくに月は隈なく照り渡りて、邊り靜かなるに、とある片折戸の家より琴の音の洩るゝに、駒を止めて、よくきけば、想夫戀の曲なり、兼ねて御所にて、仲國の笛を仕り、小督と合奏せし事あれば、爪音も著るく、さては小督にはこの月に、君を慕はれての調べかと案内して御諚の趣きを傳へたり、小督は、すでに世を遁れて、明日は髪を下して姿をかえん名殘とて月に向ひて琴をかき彈らされしを端しなくも見顯はされたるにて强て仲國の爲に出家を思ひ止められ、私かに御所に歸りて、院の御寵愛を受け居りしが、後に清盛に顯はされて、遂に髪を削られたり、時に年二十三なりと、

此歌は其事をのべしなり。

をじかなく、此山里と、ゑいじけん、さがのあたりの秋のころ、

をじかなく、は牡鹿のなくなり、此山里と、ゑいじけん、は此山邊の里と詠みたる所の、なり、これは昔の歌に、

「をじかなく此山里のさがなれば悲しかりける秋の夕ぐれ」

とあるを取りたるなり、牡鹿のなく、此山里を歌に詠みたるさがと續くなり、さがのあたり、は嵯峨の邊りの、秋のころは秋の頃なり。

千ぐさの花も、さま〳〵に、むしのうらみも、ふかきよの、月にまつ蟲、まねくは尾花、はぎにはつゆの、たまむしや、

千ぐさの花も、は千種の花も、秋の野のいろ〳〵な花もなり、さま〳〵に、はいろ〳〵雜多になり、むしのうらみも、ふかきよの、は蟲の恨みも深き夜にて、蟲のなく音を恨みて泣くと見て深きは恨の深きと夜の深きとをかけたるなり、月にまつ蟲、は月に松蟲にて、松蟲を待つにいひかけたるなり、まねくは尾花、尾花は花薄の事にて、風に搖ぐ時は人の手招きする如くな

れば招ねくは尾花と云ひたるなり、昔の歌にも。

「秋の野の草の袂か花薄ほに出でて招ねく袖と見ゆらん」

などあり、はぎにはつゆ、たまむしや、萩には露の玉蟲やにて、玉蟲といはんとて、其景色の萩をもて、萩に置く露の玉と云ひ、玉蟲と續けたるなり。

そよぐをぎむし、くはいむし、なくねにつれて、仲國がれうの御馬たまはりて、そよぐをぎむし、は搖ぐ萩蟲にて、萩蟲は、尺蠖の事なり、萩は風に搖ぐものなればをぎ蟲のをぎを萩に見て、搖ぐ萩といひかけたるなり、くつはむし、は樹蟲なり、こゝは仲國の出で立ち時の秋の景色をのべしなり、なくねにつれて、仲國がはなく音に連れて仲國がれうの御馬たまはりて、は禁中には左馬の寮右馬寮とありて、馬の事を司る役所あり、その役所の馬を頂きてなり。

とのゐすがたの、ふちばかま、たづぬるひとの、おもかげに、

とのゐすがたの、は宿直姿のは御所にて夜の勤めを守るに直衣は狩衣と著る之れをいふ、ふちばかま、は藤袴にて花の藤袴にいひかけしなり、たづぬるひとの、は尋ねる人の即ち小督のなり、おもかげ、は、俤になり。

たつうすぎりの、女郎花、それかあらぬか、まぼろしの、よもぎがしまね、たづねわび、

たつうすぎりの、女郎花、は薄霞の立つ處の女郎花にて、立つは小督の俤に立つとなり、それかあらぬか、まぼろしの、は、それであるか、其れでないか、まぼろしのにて、まぼろしは、夢現の堺にてよくわからぬ事なり、よもぎがしまね、は蓬萊が島なり、ねは添へて云ふいわね、垣ね、羽ねなどの如し蓬萊島の事は蓬萊の處に註す、たづねわび、は尋ねあぐみなり。

こまひきとむる、さゝのくま、やすらふかげの、松かせに、かよふ、かよふつまおと、つまこひの、

こまひきとむる、さゝのくま、は仲國が駒を引き止めて笹の影になり、くま、は隈と、くまさゝのくまとを云ひかけたるなり、やすらふかげの、は休む陰の、やすらふ、は休むを延べたるなり、松かせに、かよふ、かよふつまおと、は松風に通ふ琴の音にて、松風の音を琴の音に見て通ふと云ひしなり昔の歌

にも、

「琴の音に聚の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけん」

などあり、琴の手にて向爪を用ひて、さゝこんなどの音が松風の如く聞ゆるなり、つまこひのは妻を戀ふ所のなり。

ねによる鹿に、あらねども、むかしおばゆる、笛竹や、あはすしらべの、まがひなき、こゑをしるべに、したひよる、

ねによる鹿に、あらねども、は音に寄る鹿になけれども、つまを慕ひてなく聲に寄り來る鹿ではなけれどにて、爪音をしるべに寄り來ると云ふ意、小督の彈く琴の音をしるべに仲國が來るを云ふ事、むかしおばゆる笛竹や、は昔を思ひ出す笛になり、あはすしらべのまがひなきは合す調べのまぎれなき、昔笛と合したる琴の調にまぎれなきなり、こゑをしるべに、したひよる、は聲を便りに慕ひ寄る仲國が笛と合奏したる琴の調べたがはぬなり。

さが野のおくの、かたをり戸、そうふれんの、しやうがは、ひよくのつばさの、雲ゐをこひ、

さが野のおくの、は京都の嵯峨野の奥なり、上に註す、かたをり戸、は諸折戸に對して片折戸とは扉一枚の折戸なり、そうふれんの、しやうがは、は想夫戀の唱歌となり、想夫戀は樂の名なり、ひよくのつばさの、は比翼の翅にて、羽を比べる鳥を云ふ、長恨歌に註す、雲ゐより、は雲ゐの高き處、上に註す、天に在りては比翼の鳥となり」とある天といふより雲ゐといひしなり、比翼の契りをなしたる雲ゐの院樣を戀ひとなり。

ばんしきでうのしらべは、松のれん理の、えだに、かよふ、こごふのつばね、世をしのぶすみかもあすは、大原に、かへんすがたの、なごりとて、

はんしきでうのしらべは、は盤渉調の調べはにて、盤渉調とは調子の名にて秋に合ふ調子なり、松のれん理のえだにかよふ、は松の連理の枝に通ふにて連理とは枝の連らなれるにて相生に註す、想夫戀といふより連理の枝と對をとりしなり、こごふのつばね、は小督の局、こがふにて假名誤れり、小督の事は初めに註す、世をしのぶすみかもあすは大原に、は世の中に隱

れゞ居る住み所も明日は大原に、小督が宮中を出でゝ隠れ居る住みかも明日よりはなり、大原は山城國にあり舊大原の莊と云ひしなり大原とも小原とも云ふ、かへんすがたの、は出家に姿をかへんとするなり、大原に所をかへると出家に姿をかへるとを云ひかけしなり、小督の局が明日は出家して大原の里へ隠れんとする、などりとて、は名殘にとてなり。

よはに手ならすつまごとの、いはこすおもひせきかねて、なみだにそでを、かしはばや、

よはに手ならす、は夜半に鳴すなり、つまごとの、は琴の、小督の局が琴を彈き居るをいふ、いはこすおもひ、は岩を越ゆる樣な思ひ胸にこみあげる切な思ひなり、せきかねて、は止め兼ねてなり、思ひ切なるを水のせき兼ねて岩をこすに形容したるなり、岩越とは琴の柱の上の爪になりたる處を岩越といふ此の縁語にいひかけたるなり、なみだにそでを、かしはばや、は涙に袖を貸すに柏葉とつゞけしなり涙に袖の濡るゝをいふ、小督の局が琴を彈きながら、さすが思ひに袖を濡すをいふ。

人目もいかゞあやめかたいとのいろねをしるべにて、さし入月の、雲ゐより、御つかひに、まいりしと、かしこき君が、みことのり、

人目もいかゞ、は人の見る目も何んとあらう、あやめかた、は黒白にて、黒白もわからぬと云ふ意なり、絲は黒色白あるものなれば黒白と云ひて、いとのいろねをしるべにて、は琴の絃の音色を便りにて、仲國が小督の琴の音を便として來るをいふ、さし入月の、は月影のさし入るなり、雲ゐより、は雲居の高き處即ち宮中の院樣よりなり月は天上にあるものなればつきのさす雲居と云しなり、御つかひに、まいりしと、は御使ひに參りたりとなり、かしこき君が、みことのり、は有難き君院樣が御言葉なり、詔とは陛下の御言葉をいふ。

野べのをちかた、わけきつる、つゆの玉づさ、さしよする、つまどのはしの、えんのつな、又ひきむすぶ御かへりごと、

野べのをちかた、わけきつる、は野邊の遠方より來るなり、つゆの玉づさ、は野邊と云ひたるより露と云ひ露の玉といひ玉章と續けたるなり、玉章は

手紙なり、さしよする、はさし寄せるにて、手紙をさし寄せるなり、つまどのはしの、はつまど、は簾の戸の兩方へ開くもの、はしは端なり、えんのつな、は縁のきづななり、つまどといひたるより縁と云ひ、縁といひかけたるなり、又ひきむすぶ御かへりごと、は又引き結ぶ御返事なり、縁を引き結ぶ返事にて院樣よりの呼び使ひによりまた引き結ぶなり。

そえて、たまはる、いつゝぎぬ、きぬ〳〵おくるほどもなく、むかひのくるま、たてまつり、むかしにかへる、もゝしきや、むかしにかへる、もゝしきや、千代をちぎりの松のことのは、

そえてたまはる、は添へて賜はる頂くにて御玉章に添るなり、そえのえはへにて假名誤まれり、いつゝぎぬ、は女の裝束をいふ俗に十二一重といふ、きぬ〳〵おくる、は五衣の衣をおくり賜はるに後朝をおくるを云ひかけしなり、後朝とは男女相逢たる翌朝をいひこゝは朝の早き事を云ひたるにて、仲國が小督を見出たる翌朝すぐになり、ほどもなく、は間もなくにて、むかひのくるま、たてまつり、は迎ひの車を奉りて、翌朝早く小督の局を迎ひの爲の車を遣りて、むかしにかへる、もゝしきや、は百敷にて上に註す、是所にては宮中の事を云ふ、小督が昔の通り宮中に歸るを云ふ、千代をちぎりの、は千代を契りの、松のことの、は松の言葉にて、松の葉に言葉を云ひ係けしにて又院樣と目出度契るをいふ。

長恨歌曲

今はむかし、もろこしに、いろをおもんじたまいけるみかど
おはしませしとき、やうかのむすめ、かしこくも君にめされ
て、あけくれのおんいつくしみ、あさからず常にかたはらに
はんべりぬ、みやのうちの、たをやめ、三千のちやうあいも、わ
が身ひとつの、春の花、ちりていろかも、なきくまの、ありかを
たづね、みなれざを、さしてはるゝ、行船に、はうしはなみの、
うきねする、とこよのくにに、來て見れば、ろうかくれいろう

として、ごうんおこれり、うちになまめく、めのわらは、ことにすぐれて、ぎょくしんの、すがたは、いづれ、りくはいつし、あめをおびたる、そのけはひ、見るよりそれと、ことのはも、なんだこぼれて、らんかんを、ひたすもいかに、なれそめし、りざんのむかし、おもひやる、あらなつかしのみやこ人はづかしながらありしよの、そのむつごとも、きこえつる、つゆのちぎりの、うさはらし、いふて見よなら、ひとかたに、おぼしめすかや、ふかき江に、春のこほりの、うすきはいやよ、おもひあふよは、うちとけて、ねみだれ髪を、其まゝに、とりつくろはぬ、をなごぎを、かあいがらんせ、からすばの、いろにこの身をそめ絲の、むすびめかたき、かたらひも、えんつきぬれば、いたづらに、またこのしまに、かへりきて、猶なつかしき、いにしへを、おもひい

づれば、あはれなる、そよやげいしやう、ういのきよく、まれにぞかへす、乙女子が、まれにぞかへす、をとめこが、袖うちふりし、こゝろしりきや、さるにても、君には此世、あひ見んこともよもぎかしまつどり、うきよなれど、戀しやむかし、こひしやむかしの、ものがたり、つくさば、月日も、うつりまひの、しるしのかんざし、給はりて、みやこにかへる、家づとは、ふみにもまさる、文月の、なぬかのよはの、さざめごと、ひょくれんりも、今ははや、かれ〳〵なりし、うちぎり、あめのとこしなへなるも、つちのひさしく、ふりぬるも、つくるときあり、このゆうらみ、めん〳〵、らう〳〵としてたえまなく、いまにのこせし筆のあと。

長恨歌、とは楊貴妃の事を詠みたる、白樂天の詩なり、其意は唐の玄宗皇帝といふ帝、初めの程は驕を止め、儉約を專にし政道穩かなりしが、後漸く政に倦み諫める者、直き者を退け、女色に惑はれ、多く侍女ありけるが中に、楊貴妃といふ寵妃ありて、才色勝れ、寵を專らにし驕を極めしが、偶々安祿山の亂れ出來りて兵を出されしに中途にして兵進まず、事の起りは楊氏の爲なればとて帝に迫まりて、楊貴妃を馬嵬といふ所にて殺さしめたり、後兵亂治まりて帝宮中に歸られたり見れば、何事も舊のまゝなれど、寵妃の貴妃のみあらざるに、帝は欝々として、樂まず、時に仙人の術を行ふものありて、能く死せる人に逢ふ術をもなすといふにぞ、之れに楊貴妃の魂魄を求めしめられたり、是に於て方士は天の上、地の底を隈なく尋ねけれども更にそれらの影だに見當らず、遂に蓬萊山に來りて漸く貴妃に逢ひて其趣きを述べしに、答へていふには、我にはもと天上界の仙人なりしが、前生の恩愛により下界に下りて、帝と夫婦となりしも、死してはまた恩愛絶たれば、仙人となりしに、汝ぢの來たりてまた恩愛生せしかば、久しからずしてまた下界に生れて帝と夫婦となるべしと云ふ、使者の方士は歸りに臨みて御逢ひ申したる驗しとなる品を與へられよといひければ、貴妃は平生、挿す所の釵を與へけるに、使者は、之丈にては信となすに足らざればなにか帝と密に契られし事もあらば、其れを聞かんと云ひしに、七月七日長生殿にて人なき夜半、私かに語りて、もし天にありては比翼の鳥となり、地にありては連理の枝となり、いつ迄も夫婦とならんと誓ひたり、天の長き地の久しきは時ありて盡く、此恨みは何時迄も長く盡きずと云ふ、方士は歸りて玄宗皇帝に釵を示しけるに、帝は笑ひて之は何所にでもある品にして貴妃にあひたる信とするに足らずとありければ、彼の契りの事を告げしに、帝は涙を流して泣き、誠に違ひなしと云はれしと云ふ、之れを長恨歌と云ひたるは詩中に、此恨綿々無絶期とあるを取りたるにて、當時唐の天子の事をいふは憚りあれば漢の天子に作り替へて云ひしなり、此のうたは其詩の意を取りて述べしなり。

今はむかし、もろこしに、いろをおもんじたまひけるみかどおはしませしとき、

やうかのむすめ、かしこくも、君にめされて、あけくれの、おんいつくしみ、あさからず、

今はむかしは今から云ふと昔の事であるとなり、もろこしにいろをおもんじたまひけるみかどおはしませしときは支那に女すきな天子が在られしときに、之れは長恨歌に「漢王色を重じ傾國を思ふ」とあるこれなり、みかどは唐の玄宗皇帝の事なり、やうかのむすめは楊貴妃の事、楊貴妃は楊玄恆が女なれば楊家の女と云ひたるなり、楊は氏貴妃は母官名なり、かしこくも君にめされては畏れ多くも帝に召し出されてにて、之は帝天下を治す長き年月美人を思ひて探されしも得ず、時に楊氏に女ありて奥深く生ひ育ちければ人知らず、されど天然の美しさは隠されず、忽ち撰ばれて陛下の御側に參りしなり、初め貴妃は太子の妃なりしが玄宗皇帝、之れを取りて太子には別に妃を與へたり、あけくれのは朝夕にて毎日の事なり、おんいつくしみは御寵愛をいふ、あさからずは深きをいふ、貴妃は一度笑へば百媚生じ宮中の他の女子は顔色なく帝は貴妃に溺れて朝起きをせず、あけくれ酒宴に侍りて暇も無く春は春遊に從ひ夜は夜を專らにすとある之なり。

常にかたはらにはんべりぬ、みやのうちの、たをやめ、三千のちやうあいも、わが身ひとつの春の花、ちりていろかもなきたまの、

常にかたはらにはんべりぬは常に帝の御側に侍るとなり、みやのうちのたをやめは宮中の美人なり、たをやめは、まへに註す。三千のちやうあいもわが身ひとつの春の花は三千の寵愛も我身一つに集め春の花の如く榮えてなり、後宮に三千人も女中あれども寵を得ず貴妃一人帝の寵を專らにせしかば三千人分の寵を一人に引受けたるなり、楊貴妃は自分の寵のみならず一家身寄まで立派な役になり、榮えければ、世の中の人は男の子を生みても大名にさへなるは六つかしけれど女の子を生みて妃とならば、此上なしとて女子の生るゝを喜ぶに至れりと、ちりていろかもは春の花の散て、美しき色香もなり、なきたまのは色香のなきと云ふになきたまと續けたるなり之は驕り極めし泰平の世も、一朝安祿山の戰ひ起りて

兵を出し、皇帝は貴妃と共に宮中を逃げ、都を出づる事百里、軍進まず、奈何とも出來ざれば遂に兵士の云ふがまゝに、貴妃を出し殺せしに、皇帝は見るに忍びず、面を掩ひて救ふ事出來ず、貴妃は馬嵬の露と消たり、花のちりてと云ひて楊貴妃の死せる事を云ひたるなり。きたまは其魂魄なり。

ありかをたづね、みなれざを、さしてはる〳〵、行船に、はうしはなみのうきねする、とこよのくにに、來て見れば、

ありかをたづねは魂魄の在り所を尋ねんと、みなれさを、は水馴棹にて、舟をやる棹なり、さしてはる〳〵、行船に、は遠方をさして行く船になり、さしては棹をさすと、さして行くとをかけしなり、はうしは仙人の術を行ふ者の死したる貴妃の魂魄を求めに船に乘りて行きたる人なり、なみのうきねする、は波の上にて舟の中なれば水に浮きつゝ寢る浮寢と、常世の國が海中に浮きあるとを云ひかけしなり、とこよのくにに、來て見れば、は常世の國に來て見るとにて、常世の國は蓬萊の國にて普通の人の行かれぬ、神仙の祕國なり。

ろうかくれいろうとして、ごうんおこれり、うちになまめく、めのわらは、ことにすぐれてぎよくしんの、すがたは、いづれ、りくはいつし、あめを、おびくる、そのけはひ、

ろうかくれいろうとして、ごうんおこれり、は樓閣玲瓏として五雲起れり、蓬萊の國の立派なる建物、玲瓏は透き通るなり、五雲は五彩の雲、うちになまめくめのわらは、は其中に上品な女の童が仙人なり、ことにすぐれてきよくしんの、は取分け勝れて、玉眞のにて、字は玉眞といひ雪の膚、花の顏美しき貴妃なり、すがたは、は玉眞の姿はなり、いづれ、りくはいつし、あめを、おびたる、そのけはひ、は梨の花が一枝雨を浴びたる樣な其樣子となり。

見るよりそれと、ことのはも、なんだこぼれて、はそめし、りさんのむかし、おもひやる。

見るより、は玉眞が方士を見るより、それと、ことのはも、なんだこぼれて、は其れとの言葉もなくて涙溢てなり、らんかんを、ひたすも、いかに、は欄干を濡すものならんとなり、なれそめし、は馴れ初めし契り初めしにて貴妃が

皇帝と契りし初めなり、りさんのむかし、おもひやる、は昔驪山にて剛れ初めし事を思ひやると之れは驪山の下に温泉宮ありて秦の始皇帝が石を疊みて建てたるを唐の代に至りてまた繕ひ清華宮と云ひ玄宗皇帝は之に遊びたる時に初めて楊貴姫を見て召し出されたるなり。

あらなつかしのみやこ人、はづかしながらありしよの、そのむつごとも、きえはつる、つゆのちぎりの、うさはらし、いふて見よなら、

あらなつかしの、はあゝ懐かしきなり、みやこ人、は都人にて方士をさして いふ、はづかしながら、は耻かしき事なれどもなり、ありしよの、は世に在りし時のにて貴妃は今は死せるものなれば此世にありし時のとなり、そのむつこと、は其睦言にて睦言は男女の間の私め言にて、貴妃と皇帝のなり、きえはつる、は消えて無くなる、つゆのちぎりの、は露の如き儚なき契りのにて露はすぐ消ゆるものなれば、消えはつる露と續けしなり、いふて見よなら、はいふて見よと云ふなら申上げんとなり。

ひとかたに、おぼしめすかや、ふかきえに、春のこほりの、うすきはいやよ、

ひとかたに、おぼしめすかや、は一方に思はれるであらうかとなり、ふかきえに、は深き河にして、河の大なるを江といふ、春のこほりの、うすきはいやよ、は春の氷の如く、薄きは厭なりとにて、深き江と云ひたるより薄きと對を取りたるなり、うすき契りはいやとなり。

おもひあふよは、うちとけて、ねみだれ髪をそのまゝに、とりつくろはぬ、をなごぎを、かあいがらんせからすばの、いろにこの身をそめ絲の、むすびめかたき、かたらひも、えんつきぬればいたづらに、またこのしまに、かへりきて、

おもひあふよは、は思ひ合て逢ふ夜はなり、うちとけて、は心が打解けてなり、ねみだれ髪をそのまゝに、とりつくろはぬをなごぎを、は寢くたれ髪を其儘にしては取繕はない女の心をなり、かあいがらんせ、は可愛く思ふて愛し給へとなり、からすばの、は鴉の羽のにて色に係るなり、いろにこの身を、は色に此身を、そめ絲の、は染色にて絲の色に染むるに係けて男女の色の爲に身を染めたるをいふ、むすびめかたき、かたらひも、は結び目の堅き

語り合ひもにて、堅きは絲の結び目の堅きと語ひの堅きとをいひかけたるなり、えんうきぬれば、いたづらに、は緣が切れると徒らに、恩愛きれてなり、またこのしまに、かへりきて、は又此仙人の蓬萊の島に歸り來りてにて、貴妃は天上界の仙人なりしが下りて玄宗皇帝の妃となりしもまた仙人の島に歸り來りたるなり之は初めに註せり。

猶なつかしき、いにしへをおもひいづればあはれなる、そよやげいしやうういのきよく、まれにぞかへす、乙女子が、まれにぞかへすをとめこが、袖うちふりし、こゝろしりきや、

猶なつかしき、いにしへを、は猶も懷かしき古へ過ぎし方をなり、おもひいづれば、あはれなる、は思ひ出すとあはれなる、そよやげいしやうういのきよく、は鶯破霓裳羽衣の曲之れは樂の名にて玄宗皇帝が術つかひの力によりて月の世界に天上せし時多くの美女が皓衣白裳にて白き鶴に乘りて立派なる樂器にて種々の音樂を奏せし事を下界に下りて後忘れ難く、耳に覺えて調を定め音を成して作りしものにて委しくは芙蓉の峯の處に註す、まれにぞかへすをとめこが、は乙女子にて年若き女の子なり、袖うちふりし、は袖を打ち振りしなり、こゝろしりきや、心を知りたるかとなり。

さるにても、君には此世、あひ見んことも、よもぎがしまつどり、うきよなれどもさるにても、は其れにしてもなり、君には、は玄宗皇帝をさしていふ、此世あひ見んことも、は此世にて相見る事もなり、よもぎがしまつどり、は仙人の住む蓬萊の島つ鳥をいふ、相見る事もよもやと云ふ意に寄せて、よもぎかしまと云ひたるなり、うきよなれども、は憂世なれどもにて島は水中にあるものなれば浮と憂をいひかけたるなり、辛き世なれど昔が戀しと云ひしなり、戀しやむかし、は昔は戀しき事よなり、こひしやむかしの、ものがたり、つくさば、は戀しき昔の物語を云ひ盡くさばなり。

月日も、うつりまひの、しるしのがんざし、給りて、みやこにかへる家づとは、ふみにもまさる、文月の、なぬかのよはの、さゝめこと、

月日も、うつりまひの、は月日も移りにて移りにうつり舞のと云ひ係けたるなり、しるしのかんざし給りて、は信の釵を頂きてにて、初に註す、みやこにかへる家づとは、は都に歸る方士のみやげはなり、ふみにもまさる、は文よりもまされたる、文月のなぬかのよはの、さゝめごと、は七月の七日の夜半の睦言をいふ、玄宗皇帝と楊貴妃との間の睦言にて、之は初めに註す、即ち「七月七日長生殿夜半無人私語時、在天願爲比翼鳥、在地願爲連理枝」とある之れなり。

ひよぐれん理も、今ははやかれ〳〵なりし、うきちぎり、あめのとこしなへなるも、つちのひさしく、ふりぬるも、つくるときあり、このうらみ、めん〳〵、らう〳〵としてたえまなく、いまにのこせし、筆のあと、

ひよぐれん理も、は比翼の鳥連理の枝にて、相生に註す、是所は玄宗皇帝が貴妃と天に在りては比翼の鳥となり、地に在りては連理の枝となり長く夫婦とならんと契りしをいふ、今ははやは今となりてはすでになり、かれ〳〵なれし、は中の杜絶えしをいふ、連理の枝と云ふより木の枯るにいひ係けたるにて男女の中の絶えしを枯れるといふ、うきちぎり、は愛き契りなり、あめのとこしなへなるも、は天の長くかはらぬも、つちのひさしく、ふりぬるも、は地の久しく月日經てなり、つくるときありこのうらみ、は盡く る時ありてなり、此恨みは此恨なり、めん〳〵ろう〳〵、は綿々にて續く容なりたえまなく、は絶える時なくにて之は「天長地久有時盡、此恨綿々無絶期」とあるこれなり、いまにのこせし筆のあと、は今に殘せし筆の跡即ち長恨歌の詩の事なり、めん〳〵と恨の盡きざるより筆の跡の絶ざるに云ひ係けたるなり。

葵上

三ツの車に、のりのみち、くはたくのうちをや、出ぬらん、夕顔

のやどの、やれぐるま、やるかたなきこそ、かなしけれ、うき世はうしのをぐるまの、めぐるやむくひなるらん〳〵、おほよそりんゐは、ぐるまのわのごとく、六しゆ四しやうを、出やらず、にんげんのふじやう、ばせうはうまつの、世のならひ、きのふの花は、けふのゆめと、おどろかぬこそ、おろかなれ、身のうきに、人のうらみの、なほそえて、わすれもやらぬ、わがおもひ、せめてやしばし、なぐさむと、あづさのゆみに、をんれうの、これまであらはれ、出たるなり、あらはづかしや、いまとても、しのびぐるまのわがすがた、月をばながめ、あかすとも、月には見えし、かげろふの、あづさのゆみの、うらはづに、立よりうきを、かたらなん、あづさの弓の、おとはいづくぞ、あづまやの、もやのつまどに、ゐたれども、すがたなければとふ人もなし、ふしぎやな、たれとも見えぬじやうらうの、やぶれ車に、めされたるに、あをにようばうとも、おぼしき人の、牛もなき、車のながへにとりつき、さめ〳〵となき給ふ、いたましさよ、もしかやうの人にてもや、候らん、大方は、すゐりやう申し候、たゞつゝまず、名をおなのり候へ、それしやばでんくわうの、さかひにはうらむべき人もなく、かなしむべき身も、あらざるに、いつさてうかれ、そめつらん、只今あづさの、ゆみのおとに、ひかれて、あらはれ、出たるをば、いかなるものとか、おぼしめす、これは六條のみやす所の、をんりやうなり、われ世にありし、いにしへは、うんしやうの花のえん、春のあしたの、ぎよゆうになれ、せんとうの、もみぢの、秋のよは、月にたはぶれ、色香にそみ、はなやかなりし、身なれども、おとろへぬれば、あさがほ

の、ひかげまつ身の有樣なり、たゞいつとなき、わが心、ものうきのべの、さはらびの、もえいでそめし、思ひの露、かゝるうらみを、はらさんとて、これまであらはれ、出たるなり、おもひしらずや、世の中の、なさけは人のためならず、人われにつらければ、かならず身にも、むくふなり、何をなげくぞ葛の葉の、うらみはさらに、つきすまじ、あらうらめしや、今はうたでは、かなひ候まじ、あらあさましや、六條の御安所ほどの御身にて、うはなりうちの、御ふるまひ、いかで、さることの候べき、たゞおぼし、とまりたまへ、いやいかにいふとも、いまはうたでは、かなふまじと、まくらに立より、ちやうとうてば、此上はとて立よりて、わらはゝあとにて之を見する、今のうらみは、ありしむくひ、しんいのほむらは身をこがすおもひしらずや、おもひしれ、うらめしの心や、あらうらめしの、こゝろや、人のうらみのふかくして、うきねになにをか、たまふとも、いきて此世に、ましまさば、水くらき、澤邊のほたるのかげよりも、ひかるきみとぞ、ちぎらん、わらは、よもぎふの、もとあはさりし身となりて、はずゑのつゆと、きえもせば、それさへことに、うらめしや、夢にだに、かへらんものを、わがちぎり、むかしかたりになりぬれば、猶もおもひはますかゞみ、そのおもがげの、はづかしや、まくらにたてる、やれぐるま、うちのせ、かくれゆかふよ、〳〵、

葵上

これは紫式部の著したる源氏物語にある事にて葵上とは物語の主人公光る源氏の君の御本妻なり、源氏の君十二歳にて清涼殿の東の廂にて御

元服されし時引入大臣加冠し、其の夜大臣の姫君添臥をす、これが葵上にて源氏廿一歳の時懐姙し御子を生まれしを、夕霧の大將といふ、然るに葵上産前より物の怪にて惱まれ産後少し快よかりしが、やがて俄に死せらる、これは六條の御息所の生靈のわざなりしなり、

扨六條の御息所とは前坊として東宮樣が御位に御即き遊ばされずして東宮のまゝ辭せられたる、即ち前の東宮樣の未亡人なり御女一所持たれて、六條に住まはれければ、六條の御息所といふ、源氏この御息所に通はれて契り淺からざりしが、或加茂祭に源氏の渡らるゝにあり、物見車として、貴婦人は車に乘りて見る事なるが、此の御息所も車に乘りて行かれし所、後より葵上の車來り、何樣源氏の御本妻として勢力も強く、そこらの車をおしのけて、其の車を立てしが、御息所の車はこれが爲甚しき辱を受けしを御息所は遺恨に思ひ怨みし生靈が顯はれて葵上を取りころしたるなり、昔は病氣は物の怪より來るといひ修驗者を頼みて、これの怪をおとすことありしなり、これもその有樣をいひしなり。

三ッの車に、のりのみちくわたくのうちをや、出ぬらん、夕顔のやどの、やれぐるまゝ、やるかたなきこそかなしけれ、

生靈の顯はれ來る所なり、三つの車に、のりのみち、とは法華經譬喩品にある事にて、羊鹿牛車の三つをいふなり、その意は、幼なき子供多く遊び居る時に俄に大火事出できて長者の家燒け來る時に、父の長者が早く家を出でよと子供に諫むれども、戯れ事に心染みて出でざるを長者方便をつかひて、羊鹿牛の三つの車を作りて與へん、乘りて出よと云ひければ子供は是れに引かれて、漸く出でたるに又種々の寶を飾りたる大車をあたへて安穩に火事を逃れしめたりといふたとへにて、これは此の世は火宅の如し、安穩ならずその衆生を救はん爲にいろ〳〵の方便をなし、先づ小乘を說き、それが熟して、一乘妙法を說き給ひ、終に成佛せしめ給ふ、佛の御心にて、羊車は聲聞に譬へ、鹿車は緣覺にたとへ、牛車は菩薩にたとへ、寶車は大乘妙典の法華にたとへたるなり、

「世の中に牛のくるまのなかりせばおもひの家をいかていでまし」

「今ぞしる三つの車にのりの道は門より外にありけるものを」

この歌はその意を詠みたるなり、三つの車に乗りて火宅を出づ即ち佛の教によりて此の世を解脱するといふ事なり、車に乗ると法りの道とつゞけたるにて法りの道とは佛の道といふ、くわたくのうちをやいでぬらん、は此の世を火宅の如しと佛教にていふなり、即ち此の苦の世中を解するならんといふ意なり、夕顔のやどのやれぐるまやるかたなきこそかなしけれ、此の夕顔といふことは源氏の中にある名なれど別にこゝに繰のなき事にて、破れ車のやり所なきこそ悲しといひて、御息所の車の破られし事のやるせなく口惜しく悲しとなり、歌にも、

「思ひやるかたのなきこそかなしけれやぶれぐるまのかゝるわが身は」

とあり、これを取りたるなり、

うき世はうしのをくるまの、めぐるやむくひなるらむ〳〵、おほよそりんゑは、くるまのわのごとく、六しゆ四しやうを出やらず、

うき世はうしのをぐるまの、は憂き世は牛の小車の如くつらきものとなり、牛の小車といふは、苦しき事の枕詞にて、それは天竺に女人提韋が身を焼きて天に生れんとせしを、辨才法師が見て、汝身を焼くともいかで罪は亡びん、牛の車を苦しみて車を砕くとも又新に車をかくるが如し、罪の亡びぬ間は益なしと云ひしといふことあり、これより出たるなり、めぐるやむくひなるらん〳〵、は世の中の報ひは廻り合せなりといふ意にて、上に車とあれば車の廻ることにいひかけ、世の廻り合せをいひたるなり、世の因果の應報をいひたるなり、おほよそりんゑは、くるまのわのごとく、は凡輪廻は車の輪くにて、輪廻とは佛教にていふ言葉にて、人の生死、應報、物の移りかはりは休まず車の輪のめぐる如きものなりといふなり、六しゆは六道なり、地獄、餓鬼、畜生、人道、天道、修羅、四しやうは四生にて卵生、胎生、濕生、化生にて、卵生とは孔雀の如く卵より生れるもの、胎生とは牛馬の如く體を具へて生れるもの、濕生とは飛蚊の如く濕氣より生れるもの、化生は諸天の如きものにて凡ての生に此の四通りあるも俱舎論にあり、此れをいひたるなり、

「六の道四つのちまたの苦しみをいつかはいりてたすけはつべき」

とあり、出でやらず、ば此の六趣なり、四生の境を出でずとなり。

にんげんのふじやう、ばせをはうまつの世のならひ、きのふの花は、けふのゆめと、おどろかぬこそおろかなれ、

にんげんのふじやう、ば人間は不定にて、一定せず變るをいふ、ばせうはうまつの世のならひ、御經に此の身は泡の如く、久しく立つを得ず、是身は芭蕉の如く、中堅き有るなし、とあるを取りたるにて、はうまつは泡沫あわなり、人間は不定にて芭蕉や泡の如き處の世のならはせとなり、

「風ふけばあだにやれゆく芭蕉葉のあはれと身をも歎くへき世かな」

などいふ歌もあり、きのふの花はけふのゆめとおどろかぬこそおろかなれ、は斯の如き世の中に生れて昨日の榮華は今日より見れば夢なりしと悟り思はぬこそ凡夫の淺ましく愚となりとなり。

身のうきに人のうらみのなほそえて、わすれもやらぬ、わがおもひ、せめてしばし、なぐさむと、あづさのゆみに、をんれうの、これまであらはれ、出たるなり、

こゝは怨靈の寄り來る處なり、身のうきに人のうらみのなほそえて、は御息所の言ふにて身の憂き事に、加へて人の怨みも添へて、にて人の怨みは葵上を怨むこゝろなり、初の處に註す、わすれもやらぬ、わがおもひ、は忘れ遣る事の出來ざる我が思ひにて、彼の加茂の車爭ひに恥かしめられし怨みをいふ、せめて、しばし、なぐさむと、切めては暫くでも慰むであらうかと思ふてなり、あづさのゆみにをんれうの、これまであらはれ出たるなり、に怨靈をよせ、降伏させるわざありて、梓の弓をならすなり故に梓の弓にのせられて來ることをいひしなり。

あらはづかしや、いまとても、しのびぐるまのわがすがた、月をばながめ、あかすとも、月には見えじ、かげろふのあづさのゆみのうらはづに、立よりうきをかたらん、あづさの弓の、おとはいづくぞ、

あらはづかしや、いまとても、しのびぐるまのわがすがた、はあゝ恥かしき事よ今も猶綱代の車に乘りし時の我が姿を思へばなり、しのび車は綱代車にて忍ぶ時にはこれにのるなり御息所は加茂祭に綱代車なりしが恥

かしめられしかば、其時の事を思ひ出してなり、月をばながめ、あかすとも月には見えじかげろふの、は月を眺めて慰めても、月には慰められず、かげらふ、は春の日向の煙の如く見ゆるものなり、されば月には月見えずといひたるなり、かげろふは、春のものにて梓といふことも春の枕詞に用ゆるものなれば、かげろふとはいひて梓弓につけたるなり、梓弓は梓の木にて作りたる弓なり、これを鳴らして怨靈を寄せるなり、うらはづに、は末彌として弓の末をいふ、占といふ意をかけたるにて、占なふことなり、立よりうさをかたらん、は立寄りて憂さを語らうとなり、立寄りによりなしといふ意をかけたるにて、怨靈のこれによる樣になしたるなり、あづさの弓の、おとはいづくぞ、は梓の弓のある音は何處ぞと怨靈が寄らんとてたづねていふなり。

あづまやの、もやのつまどに、ゐたれども、すかたなければ、とふ人もなし、ふしぎやな、たれとも見えぬ、じやうらうの、やぶれ車に、めされたるに、あをにようばうとも、おぼしき人の、牛もなき、車のながへにとりつき、さめ〴〵となき給ふ、

あづまやの、は四阿とかき、四方に軒ありて雨だりの四方に落つる屋、柱四つあるをいふ、もやのつまど、は母屋の妻戸にて、母屋は家の建物の中にて主だちたる住居所なり、つまどは遣戸にてはなく左右の戸を妻あはせに開き閉づる樣にしたるをいへり、一枚ひらきもあり、あづまやのもやとは續けてよくいふ事に昔の歌にも、

「人づまはあな煩はし四阿のもやのあまりもなれしとぞ思ふ」

などあり、ゐたれども、すがたなければ、とふ人もなし、は阿屋に立ち寄り居たれど怨靈にて姿なければ人も知らずとなり、ふしぎやな、は不可思議なる事かなとなり、たれとも見えぬじやうらふの、は誰れであるとも分からぬ上臈のにて上臈は女官の上等なる人にて、二三位典侍、大臣の女大臣の孫等なり、やぶれ車に、めされたるに、あをにようばうとも、おぼしき人の、は破れ車に上臈の乘られたるに、若き女房とも思はれる人がなり、女房とは女の仕へ人をいふ、牛もなき車のながへにとりつき、さめ〴〵となき給ふ、は牛なき破れ車の轅に取り付きて濕め〴〵と泣かれるにて、御息所が

葵上の車人に亂暴され車を破られたる樣をいふなり、轅は車の前にある木なり、櫻狩の處に註せり。

いたはしさよ、もしかやうの人にてもや候らん、大方はすゐりやう申し候、たゞつゝまず、名を御なのり候へ、しやばでんくわうのさかひには、うらむべき人もなく、かなしむべき身も、あらざるに、いつさてうかれ、そめつらん、

いたはしさよは、痛はしにて氣の毒なる樣よとなり、もしかやうの人にてもや候らん、大方はすゐりやう申し候、は若しや斯々の人なんかとは、大抵推量して居り申すとなり、たゞつゝまず、名を御なのり候へ、は推量して居れど速につゝみ隱さず名を名乘り給へとなり、是れしやばでんくわうの、さかひには、は娑婆は此の世なり、佛敎にていふ言葉なり、でんくわうとは佛書に人生れて世に在る、石火電光の如しとあるを取りたるにて、此の世は電の光の如く疾く過ぐるものとの意なり、うらむべき人もなく、かなしむべき身も、あらざるに、は短き世に人を恨むべき事もなく、身を悲しむべきやうもなきにとなり、いつさてうかれそめつらん、何時破れ初めたので

あらう、となり。

只今あづさのゆみのおとに、あらはれ出たるをば、いかなるものとか、おぼしめす、これは六條のみやす所の、をんりやうなり、

只今あづさのゆみのおとに、あらはれ出たるをば、は只今梓の弓の鳴る音す、は何人と思はるゝぞとなり、これは六條のみやす所の、をんりやうなり、に怨靈を寄せたるにつけ顯はれ出たるをなり、いかなるものとか、おぼしめは六條の御息所の怨靈なるぞとなり、六條の御息所は上に註す、怨靈とは怨みの意の來りてあだをするを云ふ。

われ世にありしいにしへは、うんやうの花のえん、春のあしたの、ぎよゆうになれ、せんとうの、もみぢの、秋のよは、月にたはふれ、色香にそみ、はなやかなりし、身なれども、

われ世にありしいにしへは、は六條の御息所が自分の事をいふなり、我れ東宮の妃として世に時めきし古へはなり、うんしやうの花のえん、春のあしたのぎよゆふになれは、雲ゐにて花の宴に馴れ暮しなりせんとうの、も

みぢの秋のよは、仙洞の御所にて紅葉の秋の夜半にはなり、仙洞は蘆姑射の子といふ事にて、仙人の住む洞なり、天皇陛下の御隠居遊ばして御住ゐ遊ばさるゝ御所を、仙人になぞらへて仙洞御所といふ、月にたはふれ、色香にそみて、は秋の月を見て心をやりなどしてなり、色香にそみて、はなやかなりし、身なれども、は色香に染みて花やかなりし身なりしとなり。

おとろへぬれば、あさがほの、ひかげまつまの有様なり、たゞいつとなき、わが心ものうき野べの、さはらびの、もえいでそめし、思ひの露、かゝるうらみを、はらさんとて、こゝまであらはれ出たるなり、

おとろへぬれば、あさがほの、ひかげまつまの有様なり、は衰へたには朝顔が日影を待つてしぼむと同じ様でやがて消ゆくべき身の有様なりとなり昔の歌にも、

「しのゝめに起つゝ花見ん槿の日影待つ間の程しなければ」

たゞいつとなき、わが心、ものうき野べの、さはらびの、は昔の歌にも、

「柴のちり打はらひ春の野にあさる蕨のものうけにして」

などある如く、蕨を物憂きといふ意にいふ、それは早蕨の手を握りたる様にて、いつとなくある氣色の殊にものうげに見ゆるとてなり、さればこゝはいつとはなしに我心の誠に物憂く覺えてといふ意なり、もえいでそめし、思ひの露、は萠え出し思ひにて、さわらびの生へ出したるにいひかけて、心の思ひの燃ゆる意なり、かゝるうらみを、は上に露といひたるより露の身にかゝる如く身にかゝる怨みにいひかけて、斯の様な怨みといふ意なり、はらさんとて、こゝまであらはれ出たるなり、は怨みを晴さんとて是所まで顯はれ來りたるなりとなり。

おもひしらずや、世の中の、なさけは人のためならず、人のためにつらければ、かならず、身にも、むくふなり、何をなげくぞ、葛の葉の、うらみはさらに、つきすまじ、あらうらめしや、今はうたではかなひ候まじ、

おもひしらずや、世の中の、なさけは人のためならずは、世の中の情は人のためでなく、必ず自分に報いて來ると云ふ事を思ひ知ずやといふ事にて昔の歌に、

「情あれば情は人の爲ならず人を思ふは身をおもふなり」

といふに同じ、我人のためつらければ、かならず身にもむくふなり、は自分が人の爲に辛い事をすれば又必ず因果の應報で、自分がつらい目に逢ふとなり、何をなげくぞ、は何事を歎き悲しむのであらうぞ、葛の葉のうらみはさらに、つきすまじ、は怨は更に盡きまいにて、葛の葉は初秋より風に吹かれると裏を見するものなり、これをうらみといひ、怨むの枕詞に用ふ、昔の歌にも、

「葛のはのうらみに歸る夢の世を忘れかたみのべのあきかせ」

などあり、あらうらめしや、はあゝ怨めしき事よとなり、今はうたでは、かなひ、候まじ、は今は打たずば叶はじ、打ずには置けずといふ意。

あらあさましや、六條の御息所ほどの御身にて、うはなりうちの御ふるまひ、いかで、さることの候べき、只おぼしめしとまりたまへ、いや、いかにいふとも、今はうたではかなふまじと、まくらに立より、ちやうとうてば、

あらあさましや、はあゝ情けなしとなり、六條の御息所ほどの御身にて、うはなりうちの御ふるまひ、六條の御息所ともあらう程の御身にて、御嫉妬打ちなどの御振舞ひにて、御息所の事は初に註す、いかでさることの候ふべき、只おぼしめしとまりたまへ、はどうして左樣なるのあるべき事ならぬをなり、只思ひ止め給へとなり、いやいかにいふとも、今はうたではかなふまじと、まくらに立より、は否、如何に云ふとも、今は打たずに置かれずと、枕かみに立寄りてなり、ちやうとうてば、はちやうは打つ音なり、打つとなり。

此上はとて立よりて、わらははあとにてくを見する、今のうらみは、有しむくひ、しんいのほむらは、身をこがす、おもひしらずや、おもひしれ、

此上はとて立よりて、ば……の立寄りてなり、わらははあとにてくを見する、は妾は後にて苦を見せるなり、今のうらみは、有りしむくひ、は今こゝでの怨みは、身に有し報ひなりとなり、しんいのほむらは、身をこがす、は怒りの爲に身を傷ふをいふなり、佛書に「身は乾薪の如く、瞋恚は火の如し、侘を燒く能はずして先づ自ら身を焦す」怒の心を火にたとへて、身を傷ふ

を焼くといひたるなり、おもひしらずやおもひしれはこの理も知らずや、思ひ知れよとなり。

うらめしの心や、あらうらめしの、こゝろや、人のうらみのふかくして、うきねになにを、たまふとも、いきて此世に、ましまさば、

うらめしの心や、ば怨めしき心よとなり、あらうらめしのこゝろや、は重ねていひたるなり、人のうらみのふかくして、うきねになにを、たもふとも、人のうらみ深ければ憂寢に何をたもふともなり、いきてこの世にましまさばは、此の世に生きてあらせられたればなり、

水くらき、澤邊の、ほたるのかげよりも、ひかるきみとぞ、ちぎらん、わらははよもぎふの、もとあらざりし、身となりて、はずゑのつゆと、きえもせば、それさへことに、うらめしや、

水くらき、澤邊のほたるのかげよりも、は闇の澤邊の水暗き邊を飛ぶ螢の影よりもなり、これは昔の歌に、

「夜光る玉とぞ見ゆる水暗きあし邊の浪にましる螢は」

などあるも同じ意なり、ひかるきみとぞ、ちぎらん、は光る源氏の君と契らんとなり、契るは男女の契りをいふ、わらはよもぎふの、もとあらざりし、身となりて、は妾は逢生のもとあらざりし身となりて、は昔の歌にも、

「尋ねても我こそとはね道もなく、深きよもぎのもとのこゝろを」

などあり。

もとあらざりし身となりて、はずゑのつゆと、きえもせず、は元有らざりし、葉末の露の如く消ゆればにて命のなき事にいふ、それさへことに、うらめしや、は其れさへも殊に怨みなりとなり。

夢にだに、かへらんものを、わがちぎり、むかしがたりに、なりぬれば、猶もおもひは、ますかゝみ、そのおもかげのはづかしや、まくらにたてる、やれぐるまうちのせ、かくれゆかふよ〳〵、

夢にだに、かへらんものを、わがちぎり、むかしがたりになりぬれば、は夢にさへも、歸るべきものなるに、わが契りの昔語となればなり、猶もおもひは、ますかがみ、は猶其上に思ひは増すといふ意にて、増鋭とつゞけたるなり、

昔の歌にも、

「うつりけん昔の影や殘るらんみるに思ひのますかゝみかな」

などあり、增鏡は眞澄の鏡となり、そのおもかげのばづかしや、は其の俤に見ゆるも恥かしとなり、まくらにたてるやれくるまうちのせかくれゆかふよ〳〵、は枕上に立てる破れ車に打ちのせて行かうといふ意なり。

ゆや

くはせんにてふまふ、ふん〳〵すとぶ、へん〳〵たる金花はりうすいにしたがつてかの來ることとし、かねはかんうんをへだてゝこゑのいたることおそし、せいすいじのかねのこゑ、ぎをんしやうじやをあらはし、しよぎやうむじやうの、こゑやらん、ちしゆごんげんの、花の色、しやらさうじゆの、ことはりなり、しやうじやひつめつの、世のならひ、げにためしあるよそほひ、ほとけももとは、すてしよの、なかばは、雲に、うへ見ぬ、わしのを山の名を殘す、寺はかつらの、橋ばしら、立出てゝみねの雲、花やあらぬ、初櫻の、きをん林、しも河原、南をはるかに、ながむれば、大ひおうごの、うす霞、ゆやごんげんの、うつりまし、みなもおなじ今ぐまの、いなりの山の、うすもみぢの、あをかりしはの、秋又、花の春は、清水の、たゞたのめ、たのもしき春も千千の、花ざかり、山のなの、おとはあらしに花のゆき、ふかきなさけを、人やしる、わらは御しやくに、參り候べし、いかに、ゆや、ひとさしまひ候へ、ふかきなさけを、人やしる、なう〳〵、にはかに村雨のして、花をあらし候は、いかに、げに、只今の村雨に、花のちり候よ、あら心なのむらざめやな、春雨の、ふるはなみだかふるはなみだ

か、櫻花、ちるをおしまぬ、人や有る、よし有げなる、ことばのたね、取上見れば、いかにせん、みやこの春もおしけれど、なれしあづまの花やちるらん、げにどうりなり、あはれなり、はやはや、いとまとらするぞ、あづまに下り候へ、何、御いとまと候や、中〳〵のこと、とく〳〵下り給ふべし、あらうれしや、たふとやな、これくはんおんの、御利しやうなり、これまでなりや、うれしやな〳〵、かくてみやこに、おともせば、又もやぎよいの、かはるべき、たゞ此まゝに、おいとまと、ゆふづける、とりがなく、吾妻路さして、行みちの、やがてやすらふ、あふさかの、せきの戸さしも心して、あけ行あとの、山見へて、花を見すつる、雁金の、それはこしち、われは又、あづまにかへる名ごりかなく〳〵、

ゆや、

ゆや、は渇谷にて宗盛の愛姫の名なり、八島の大臣平の宗盛卿嘗て遠江の國守たりし時、池田が宿の長者遊屋といふもの、姫侍從を都に召されて、御寵愛深かりしが、侍從は古郷に殘せし老母を慕ひて數々御暇を願ひしも許されざりければ、比は彌生の初め

「いかにせん都の春はおしけれど馴れし吾妻の花やちるらん」

と云ふ歌を詠みければ、宗盛は憐れに思ひ遂に御暇を頂きて東に下りしといふ、此歌は其事を云ひしなり、扨侍從は東に下りしに源氏起りて其後重衡中將關東へ下向の時池田の長者に一宿せられしに侍從は日頃思ひもよらぬ尊き方の斯かる所へ入らせらるゝ事の不思議さよとて、

「旅の空はにふの小屋のいふせきにふるさといかに戀しかるらん」

と詠みければ、中將の返りごと、

「古郷も戀しくもなし旅の空都もつゐのすみかならねば」

中將は梶原を召て今の歌の主は如何なるものぞと尋ねさせ給へば景時

申しけるは君は未だ知り給はじ、あれこそ八島の大臣の御最愛ありし侍従と申女に候と申し上げたりといふ、今も遠江の國天龍川の東藪の内に渕谷が石塔あり、

くはせんにてふまふ、ふん〳〵たる雪、りうじやうにうぐひすとぶへん〳〵たる金、花はりうすいにしたがつてかの來ることとし、かねはかんうんをへだてゝ、こゑのいたることおそし、

之は、

「花間蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金、　花隨流水香來疾、鐘隔寒雲聲至遲」とあるを取りたり、

くはせんにてふまふ、ふん〳〵たる雪、花前に蝶のひら〳〵と飛び舞ふは、紛々たる雪の如く、りうじやうにうぐひすとぶへん〳〵たる金は柳上に鶯の飛ぶは、片々したる金の如しとなり、花はりうすいにしたがつてかの來ることとし、花は流水に隨て香の來る事疾しとなり、かねはかんうんをへだてゝ、こゑのいたることおそしは鐘は寒雲を隔てゝ聲の到る事遲し、

香の疾しに對を取りしなり、

せいすいじのかねのこゑ、ぎをんしやうじやをあらはし、しよぎやうむじやうの、こゑやらん、

之は、平家物語に、

「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色盛者必衰の理を顯す、とあるを取りたるなり、

せいすいじのかねのこゑは清水寺の鐘の聲にて、清水寺は桓武天皇の御代に坂上の田村將軍の建立せしなりといふ寶龜年中沙彌延鎮といふ人、淀河に金色の流れあるを見て、其源を尋ねて行けば清水寺の瀧の下に至れり、其時此所に住む行叡といふ白衣の居士年二百歳許りなるが心に觀音を念じ口に千手の咒を誦す、汝此處に堂を建立すべし、此前の株は觀音を造るべき木なりと云ひて、山科の東の嶺に著きて下駄を落すに觀音の所見なりと之れを田村將軍聞きて家を壞ちて堂となし、其後伽藍など立しが清水寺の觀音なり、ぎをんしやうじやをあらはし、祇園精舍は中天竺

にあり釋伽如來の修業されし所なり、此中に無常院といふ一堂ありて其所に八つの鐘あり、其鳴音の中に自ら諸行無常、寂滅爲樂と說くと云ふ、清水寺の鐘が此祇園精舍の鐘の如く聞えて諸行無常の聲であらうとなり。

ちしゆごんげんの花の色、しやらさうじゆの、ことはりなり、

ちしゆごんげんは文殊菩薩にて地主權現と云ひ、日本にうつしては大己貴之命の垂迹なりと、また天の手力雄の神とも田村將軍の靈神とも云ふ、花の色は花の美はしきを云ふ、しやらさうじゆのことはりなり、しやらは印度の言葉にて堅固といふ事にて、冬も秋も枯れぬをいふ、雙樹とは兩側に並び居る樹といふ事、釋迦如來は此娑羅雙樹の中にて死し給ひて生あるものは必ず滅すといふ理を示され、其花も凋みて、榮えしものゝ衰ふるといふ理を示し、之れを娑羅雙樹の理といふ、清水寺の鐘を印度の祇園精舍の鐘と見なし清水の地主權現の花を娑羅雙樹に見なしたるなり。

しやうじやひつめの世の、ならひ、げにためしあるよそほひ、誠に例のある有樣となり。

しやうじやひつめの世のならひ、生者必滅にて、生のあるものは必ず滅ぶといふ、世の習はせなり、げにためしあるよそほひ、誠に例のある有樣となり。

ほとけももとは、すてしよの、なかばは雲に、うへ見えぬ、わしのを山の、名をのこす寺はかつらの橋ばしら、

ほとけももとは、すてしよの、は釋迦如來は元國王の位を嗣ぐべき身を、位を捨てゝ衆生を濟はんとて城を出でゝ、出家し給ひし事をいふなりなかばは雲に、うへ見えぬ、は山の高きにて、山の半は雲の爲に頂上の見えぬなり、わしの、を山の、は比叡山の事にて天竺の靈鷲山に像りていふなり、鷲は他の鳥に勝れて勇猛の鳥にて睒張出て上の見えぬといふ事なり昔の歌に、

「よも羽も並ふる鳥もあらじ上見ぬ鷲の雲の通路

名をのこす、寺はかつらの、橋ばしら、は寺は桂の橋柱之は桂橋寺の事なり

昔は下河原にありしが、洪水に流されしなり、

立出てみねの雲、花やあらぬ、初櫻の、ぎをん林、しも河原、

立出てみねの雲は立出でて見ゆる峯の雲なり、花やあらぬ初櫻は花であらうか、峯の白雲かと見ゆる、初櫻となり、ぎをん林は祇園林にて祇園社の南門の所なり、しも河原は祇園の下の巷にて昔は河原なりしなり即ち祇園の林、下河原の初櫻が白雲と見ゆるとなり、

南をはるかに、ながむれば、大ひおうごの、うす霞ゆやごんげんの、うつります、みなもおなじ今ぐまの、

南をはるかに、ながむれば、南の方をずうと眺むるとなり、大ひは大悲にて佛の衆生を惠み給ふ御心にて、大慈悲心の佛の事なり、おうごのは擁護、御護りなり、之は下にある、熊野三所の內那智、また今熊野ともいふ、本尊は千手觀音なれば、大悲擁護といふなり、うす霞は淡き霞を、ゆやごんげんの、うつります、は熊野權現の移りますにて、熊野は紀伊の國にあり、後白河院熊野は道遠しとて月の輪へ社を勸請して新熊野といふ、熊野を音にて讀めば、いうやとなり、そを略して、ゆやといふなり、之れは熊野權現を勸請したれば移りますといふなり、みなもおなじは御名も同じにてゆやは母の名を遊屋といへば同じ名と云ひしなり、今くまのは今熊野にて京都三十三間堂の南にあり後白河院熊野御參詣三十三度にも及び御信仰の餘り、京都に勸請せられしを今熊野といふ、

いなりの山のうすもみぢの、あをかりしはの、秋又花の春は、清水のたゝたのめ、たのもしき、春も千々の花ざかり、

いなりの山のは稻荷の山のにて、稻荷山は、山城國紀伊郡にあり、稻荷神社あり、藤原時平公の建立に係る、昔より信仰の厚き神にして、祭神は三座、倉稻魂の神、猿田彦の命、天宇受賣命なり、昔の歌にも、

「いなり山社の數を人とはゝつれなき人をみつとこたへん」

などあり、

うすもみぢのは若楓なり、あをかりしはの秋又花の春は、は若楓の青々としたりし葉の秋又花の春となり、あをかりしとは泉式部嘗て、いなり山に參詣せしに、時雨せしかば、如何せんと思ふ內、田を刈る童のあをとて賤しきものゝ蓑の樣にして着るものを借りて參りたり、とて下向の時に空晴

れければ此あをを返したるとき、次ぎの日彼の童は文を持て出で來りしを式部は見て、あれは何者ぞと問へば、此文を參らすとて、

「時雨ふるいなりの山の紅葉はあををかりしより思ひそめてき」

と書きたりければ、式部はあはれと思ひて此童を奥の方へよび入にけるといふ此意を含みて、いなりの山の若楓の青々したるにあををかりしといひかけしなり、清水の、は清水寺のなり、たゞたのめ、たのもしき、は一向に頼めよ頼みのあるとなり、之は清水の歌といふに、

「只頼めしめちか原のさしも草我世の中にあらんかぎりは」

とあり、もの思ひける女のはかゝしかるまじくは死なんと申しけるに示しけるとなり、しめちか原のさしも草、は三界六道一切衆生と書くなり、春も千々の花ざかり、は春もいろ〳〵の花ざかりなり、之は觀音樣には緣ある語にて、チチの花盛りは、觀音千手のちかひなり

山のなの、おとはあらしに、花のゆきふかきなさけを人やしる、

山のなの、は音羽山を云はんとてなり昔の歌に、

「山の名を見きてはいはじ月影のにほへる海も鏡なりけり」

とあるも鏡山をいはんとて、山の名をつけたる之と同じ、おとはあらし、は音羽山の嵐なり、花のゆき、は散る花を雪と見なしたるなり、音羽山の嵐に花の散りて雪の如くなるをいふ、ふかきなさけを、人やしる、は深き情を人ぞ知るにて、上に雪といひたるより深きと續けたり、こゝ迄はけしきを述べたるなり。

わらは御しやくに、參り候べし、いかにゆやひと御しまひ候へ、ふかきなさけを人やしる、

わらは御しやくに參り候べし之は遊屋の語なり、わらは、は女が自分の事を云ふ時の語なり、謙遜していふ意、御しやくに參り候べし、は御酌に參るべしとなり、ふかきなさけを、人やしる、は上に註す。

なう〳〵、爾いかに村雨のして、花をちらし候はいかに、只今の村雨に、花のちり候よ、あら心なの、むらさめやな、

なう〳〵、は呼ぶ聲なり、爾いかに村雨のして、花をちらし候はいかに、は俄

に村雨の降りて、花を散すは、なんと云ふ事ぞとなり、村雨は一幾強く降り過ぐ雨なり、げに、は誠になり、只今の村雨に、花のちり候よ、は只今の村雨にて花の散りたよとなり。

あら心なの、むらさめやな、春雨のふるはなみだかふるはなみだか、櫻花ちるをしまぬ人や有る、

あら心なの村雨やな、はあゝ無情の村雨よとなり、春雨のふるはなみだかふるはなみだか、之は備前の吉備津の宮の櫻を見て詠める歌に、

「春雨のふるは涙か櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ」

とあるを取たるなり、春雨の降るのは涙であるかとなり、櫻花ちるをおしまぬ人やあるは櫻の花の散るを惜しまぬ人があらうか、惜まぬ人がなければ、春雨の降るのは其惜しむ涙なりといふ意。

よし有げなる、ことばのたね、取上見れば、いかにせん、みやこの春もおしけれど、なれしあづまの花やちるらん、

よし有りげなる、はわけの有りさうな、ことばのたね、取上見ればいかにせんは言葉の言いぐさ、言葉を取り上げて見ると、何んとせう、いかにせんは力の及ばぬ時に云ふ言葉なり、みやこの春もおしけれど、は宗盛卿の御側を去るは惜けれどもとなり、なれしあづまの花やちるらん、は馴れし東の花や散るらんにて、母の事を云ひしなり、御側は結構なれど故郷の老母の上も氣遣ひなりとなり。

げにどうりなり、あはれなり、はや〳〵いとまとらするぞ、あづまに下り候へ、

げにだうりなり、あはれなり、誠に道理なり憐なりとなり、はや〳〵いとまとらするぞ、はとく〳〵御暇を賜ふよとなり、あづまに下り候へ、は東へ下り母の處へ歸れよとなり、宗盛卿の御言葉なり。

何、御いとまと候や、中〳〵のこと、とく〳〵下り給ふべし、

何、は答めたる時いふ言葉なり、御いとまと候や、は御暇下さりますかとなり、中〳〵のこと、は能、狂言にて然り、左樣であるといふ時に用ゆる言葉なり、とく〳〵下り給ふべし、は早〳〵下りなされよとなり。

あらうれしや、たふとやな、これくわんおんの、御利しやなり、これまでなりやう

れしやな〳〵、

あらうれしやたふとやなは侍從の言葉なり、あな嬉しき事よ尊き事よなり、これくわんおんの御利しやなり、は是は觀音の御利益なりとなり、これまでなりやは是れ迄なりと暇乞ひの辭なり、うれしやな〳〵、は嬉しき事よ〳〵なり。

かくてみやこに、おともせば又もやぎよいの、かはるべき、たゝ此まゝに、おいとまと、

かくてみやこに、おともせばは斯樣で都に御供をして居ばなり、又もやぎよいの、かはるべきは又御意の變るべき事もあらん、たゝ此まゝに、おいとまとはひたすら此壺にて御暇を賜はるべしとなり。

ゆふづけの、とりがなく、吾妻路さして行みちの、やがてやすらふ、あふさかの、せきの戸ざしも心して、

ゆふづけの、とりは雞なり、雞の尾の長きは、ゆうしでの、付けたるに似たれば木綿付鳥といふなり、とりがなくは吾妻の枕詞なり、吾妻路さして行くみちの、は東の路をめざして行く道のなり、東は東國をいふ故に東京を東の都といふなり、やがてやすらふは稍ありて休むなり、京都より東をさして行く道にすぐ休む處のなり、あふさかの、せきの戸ざしも心して、は逢坂の關なり、逢坂の關所のなり、逢坂山の關所の夕づけ鳥にてこれは清少納言の歌に、

「世をこめて鳥のそら音をはかるとも世にあふ坂のせきはゆるさじ」

とあるより取りて夕づけ鳥といひ、逢坂山とつゝけたるなり、戸ざしは戸を閉める事にて、關の戸を閉るのもなり、昔の歌にも、

「戸ざしせぬ御世に心や止むらん往來さはると越る關路は」

などあり、心して、は氣を附けてなり。

あけ行あとの山見へて花を見すつる、雁金の、それはこしぢ、われは又、あづまにかへる名ごりかな〳〵、

あけ行あとの、山見へて、は夜の明け行くあとより山見えてなり、戸ざしといひたるよりあけ行くと對を取りたるなり、花を見すつる、雁金の、は花を

見捨て行く雁のにて、之は昔の歌に、

「春霞たつを見捨てゝ行く雁は花なき里に住みやならへる」

とあるを取りたるなり、雁は暖地に住む鳥にして春は北方に向ふて飛び行き、秋は南方に向ふて行く、それはこしぢは雁は春なれば北の方をさして行く其れ故こしぢと云ひたるなり、こしぢは上に註す、われは又あづまにかへる名ごりかな〳〵、は我れはまた東へ歸る名殘りかな〳〵となり、同じ春をあとに都を去れど雁はこしぢに自分は東の方へ行くとなり。

八重垣

春立や、かどは松江の、わかみどり、雲ゐなゝめに、しら涙の、なぎさによするあらち山、ひかりのどけき、ひのみさき、そのひの河の、ながれくむ、わにがふちせのみてらまで、ぬかづきすぐる、草まくら、ぬふてふ鳥も、こゑにほふ、うめの花笠、ひより

がさ、さくらはものを、おもはする、あさな〳〵の、みねのしら雲、浦はにしきの、ひかたのかひ、名にいろ〳〵を、よびたてゝ、いそなつむてふ、しづのめの、つぼをりならぬ、つまからげ、しどけなりふりよ、その十六の島小舟、のりとるわざも、手馴れてなれて、さをもみなれの、やるせなき、涙のあらめや、うちよする、よその見るめも、何よしあしのサヨエやみをぬひぬひ、とぶほたる、袖しがうらのもやうどり、ほんに〳〵、しほらしや、そめいろ〳〵の、つたもみぢ、そまのせき山、つひ打こえてサヨヘ、月も夜ごろに、こがくれの、つまにこかるゝ、さをしかの、ほんに〳〵しほらしや、秋もくれわがの河原の、わが思ひ、えんをむすぶの、みやしろへ、あゆみをはこび、かねてねがひの、ひとすぢを、つひ打明て、いふて見よかいな、人目をはち

の、かとさとや、戀わたるらんさたのうら、雪の笘屋に友よぶ千鳥、ちりやちり〳〵ちりかゝる、ふゞきを花の、おもしろや、たびのやどりを、ゆびをれば、はる〳〵きぬるみちしるべ、見かへるそらの、八雲立、出雲八重垣つまこめに、八重がきつくる、その八重がきを、守るやかみのくにすぐに、いく十かへりの、春やまつらん、春ぞ待ぬる。

八重垣、

これは出雲の國の名所をいひたるなり、昔天照皇大神の御弟神須佐乃雄の命が出雲に至りまして、毒蛇を退治し御妻櫛猶田姫と御結婚遊ばされし御時に、雲が垣を造りしとて、

「八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるそのやへがきを」

と詠ませられたる御歌あり、是れより八重垣といひたるなり。

春立やかどは松江の、わかみどり、雲ゐなかめにしら浪の、なぎさによするあらち山、ひかりのどけき、ひのみさき、

春立や、は初春になるとなり、春の來る事を立つといふなり、昔の歌にも、

「袖ひぢて結びし水のこほれるもはるたつけふの風やとくらむ」

などあり、かどは松江のわかみどりは門には門松の若翠にて、若翠とは松の若葉の翠をいふ、地名の松江といふより門松にいひ寄せたるにて、松江は出雲の都會なり、雲ゐなゝめにしら浪のなぎさによするあらち山、これは荒乳山のことをいひたるなり、雲居は雲の居る所、天上より斜に打ち寄せるなり、しら浪は波のことなり、波の立つを遠方より見ると白く見ゆるにいふ、荒乳山といふより波の荒きにいひかけたるなり、昔の歌に、

「しら浪のなぎさによせて荒乳山神しまもればうごきやはせじ」

とあるは荒乳山を讃みたるなり、ひかりのどけき日のみさきは日の岬の事をいひしなり、日に見なして、日光の長閑に照すといひしなり、日の岬は日の御前、又御前の鼻ともいひ、出雲の西北端に突出せる岬なり、日の岬を詠みたる歌に、

「あきつすの外まで照せ日の岬くもらぬみよの光りそへつゝ」

などあり。

そのひの河の流れくむ鰐が淵瀬の、みてらまで、ぬかづきすぐる草枕ぬふてふ鳥も、こゑにほふ、うめの花笠、ひよりかさ、櫻は物を、思はする、朝なく峯の白雲山。

そのひの河のながれくむ、は簸川の事にて日の岬をいひたるより、そのひとつゝけたるにて、簸川は斐伊又は肥河、大河ともいふ、ながれくむ、は流れを汲むにて、次ぎの鰐淵寺は其の下流にあるよりいひたるなり、わにがふちせのみてらまで、は鰐淵寺といふ、鰐淵村字別所に在り、此の寺は知春上人の開基にて推古天皇眼病をうれひ給ひし時、上人の加持により平愈遊ばされしかば領地を寺に賜ひしを兩眼領といふ、眼病に靈驗ありといふ、ぬかづきすぐる、は額き過ぐるにて神佛を拜する事を額づくといふ、鰐淵寺を拜みて過ぐるなり、草まくら、は旅の事の枕詞にて直ちに旅の事にいふ、ぬふてふ鳥も、は鶯の事をいふ、

こゑにほふ、は聲も美しくなり、句ふといひて下の花にかゝるなり、うめの花笠、は鶯が梅の花の下枝に居るを梅の花傘をさすといひしなり、ひよりかさ、は日傘をいふ、さくらはものを、おもはする、は櫻の花は散り易すければ咲くと雨風の無かれかしなどいろ〳〵心配するものなれば物を思はするといひしなり、物思ふは憂ひ心配することなり、あさな〳〵のみねのしら雲、は朝毎に櫻の散りて峯には白雲の如く見ゆるをいふ。

浦はにしきのひがたのかひ名にいろ〳〵をよびたてゝいそなつむてふしづのめのつぼをりならぬつまからげしどけなりふりよ、

浦はにしきのひがたのかひ、浦は海邊をいふ、干潟は潮の引き潟になりたる所にて其の干潟を緋形に寄せて錦の緋形と續け、かひ、は貝にて干潟にある錦貝といふ事にて錦の緋形の貝となり、名にいろ〳〵を呼びたてゝ、は名を檄々に呼たてたてなり、いそなつむてふ、しづのめの、は磯菜を摘むといふ、賤しき女のなり磯菜は凡て海邊に生へる食せらるゝ草をいふ、つぼをりならぬ、つまからげ、はつぼをり裝束といふ、其のつぼをりにて昔は女

の旅行の時は正裝はなけれども、裙からげをしてなり、しどけなりふりよ、は締りのない樣子と濺の女の樣をいひしなり。

その十六の嶋小舟、のりとるわざも、手馴れてなれて、さをもみなれの、やるせなき浪のあらめや、うちよする、よその見るめも、何よしあしの。

その十六の嶋小舟、は十六嶋はツップルイにて出雲にある地名にて北濱村といふ、こゝより海苔を產す、十六といふより女の年若きにいひかけたるなり、小舟、は海苔を取る舟なり、のりとるわざも手馴れてなれて、は海苔とる業も手馴てなれてなり、舟に乘るといひかけたるにて、其れと若き女をのり取るといふ意を仄かしたるなり、さをもみなれのやるせなき、は棹も水馴れの遣る瀨なきにてみなれはゝゝに註す、浪のあらめやうちよする、は浪の荒く打ち寄するにて、其れに海草のあらめといひかけたるなり、よその見るめも、何よしあしの、は他所より見る見へも何よしあしにて、見る目に海草のめをいひかけ、善惡に葦芦をいひかけたるなり、よし人の見る目は何にともよしといふ意にて上に濺の女をのり取るといひたるより人目も云々といふなり、此の邊りは海邊の事なれば、海に緣あるものにてあやなしたるなり、

やみをぬい〳〵とぶほたる袖しがうらのもやみどり、ほんに、しほらしや、そめいろ〳〵の、つたもみぢ、てまのせき山、つひ打こえて、ザ＝ヘ月も夜どろに、こかくれの、つまにこがるゝさをしかの、ほんに〳〵しほらしや、

やみをぬい〳〵とぶほたる、闇はの中に蘆葦の間を飛ぶ螢なり、袖しがうらの、もやうどり、は袖師の浦の事をいひたるなり、袖師の浦は馬潟といふ海岸に臨めり、

「さらぬだにほさぬ袖師の浦千鳥いかにせよとてねさめ問ふらん」

とあるはこゝを詠みたるなり、もやうどり、は模樣取りにて袖師といふより、袖の模樣と續けたるなり、ほんに〳〵しほらしや、は誠に可愛らしとなり、そめいろ〳〵のつたもみぢ、は染色は樣々に莖や紅葉にて、袖の模樣といひたるより、樣々の染色をいひしなり、てまのせき山つひ打こえて、は手間の關を容易く越してなり、染色とあるより、染方の手間といふ意をいひ

かけたるなり、手間の關は天滿とも書く、馬潟瀬戸の中にある一洲にて古は關ありしなり、天滿神社あり、天滿の天神といひ少名彦の神を祭る、月も夜ごろに、こがくれのは月も夜頃に木の葉隱れになり、下の鹿の木草の下に隱るゝとを兩方へかゝる、つまにこがるゝさをしかのは妻を慕ひ焦がれて鳴く牡鹿のなり、ほんに〳〵しほらしやは誠に可愛らしとなり。

秋もくれ、わかの河原の、わが思ひ、えんをむすぶのみやしろへ、あゆみをはこび、かねてねがひのひとすぢをつひ打明けていふてみよかいな、

秋もくれは秋も暮れ過ぎ去りてなり、わかの河原のわか思ひは吾が思ひを云はんとてわかの河原と句調を取りたるなり、えんをむすぶのみやしろへ、あゆみをはこびは出雲の大社へ參詣してなり、出雲の大社は杵築神社にて大國主を祀れるが、地方よりは緣結びの神といふなり。

人目をはぢの、かたさとや、戀わたるらん、さたのうら、雪の笘屋に友よぶ千鳥、ちりやちり〳〵ちりかゝる、ふぶきを花のおもしろや、

人目をはぢのかたさとやは人目を土師の片里よ、にて、人の見る目を恥づ

意に土師をいひかけたるなり、土師とは昔上古は貴人の死には殉死とて、其の近臣親しきものなど、生きながら埋めらるゝ習はせありしを、出雲より出でたる、野見の宿禰といふ人、これを哀れみ、土にて人の形を作り、殉死の人の身代りにして、人形を土に埋める事をはじめたり、其の人形を埴輪といひ、これを作る人を土師といひたるが、埴輪を發明したる野見の宿禰はもと〳〵出雲の人なれば、出雲には土師は早くより多かりしならん、土師の住む片里といふ事なり、戀ひわたるらんは戀ひしく思ひつゝ日を送るをいふ、さたの浦は佐太村、古曾村、古志村の三つに渡る、佐太の浦を詠みたる歌に、

「與津波一つ波よる佐太の浦のこのさた過ぎて今に戀ひんかも」

などあり、さたといふより便りに見て便りと戀ひ渡るといふ意なり、雪の笘屋に友よぶ千鳥雪の降る笘屋は賤が家といふ、千鳥は海邊に群れ居る鳥なれば、友よぶといひたるなり、ちりやちり〳〵ちりかゝるは吹雪の散りかゝる樣をいひたるなり、ふぶきを花のおもしろやは吹雪の花の如く

散りかゝる有樣の面白き事よとなり、吹雪は雪が降りながら、風に散り交ふをいふ。

たびのやどりをゆびをれば、ばるゝ〳〵きぬるみちしるべ、見かへるそらの、八雲立出雲八重垣つまこめに、八重がきつくる、その八重がきを、

たびのやどりをゆびをれば、は旅に出で立つて日を送りし事を數へて見れば、となり、出雲の名所をいひたてゝ、出雲へ旅立ちして暮したる日を數へ見れば、となり、ばるゝきぬるは遙かに遠くまで來たるなり、みちしるべは道導るべ、道案内といふ意にてこゝは遠くきたる道のりをいふ意なり、見かへるそらのは來りし道を見かへる空なり、空といひて次ぎの雲につゞけたるなり八雲立此の歌初めの處に註せり、

守るやかみのくにすぐに、いく十かへりの、春やまつらむ、春ぞ待ぬる、

守るやかみのくにすぐに、神の守りにて國直ぐに、國泰平となり、守るやは守るはなり、いく十かへりの、春やまつらむ、春ぞ待ぬるは幾十年の春が待つであらうか、春が待つなりと重ねていひて祝ひたるにて、旅の空といひしより、待つといひたるにて、ゆびをり數へといひたるより、八重垣、八雲、十かへりなど數を並べてあやなしたるなり。

こゝろの奥

四季さま〳〵の、そのなかに夏は卯の花白たへの、ゆきかとばかり、よをふかみ、まなびのまどに、むすぶ夢、さめてすゞしき、衣手に、かほりはたかき、たきものも、くみあはせたる、六ツの國、それはことぐさ、これは又、十二にわかる、いとのねの、其なかばなる、さうでうの、今此時に、あふぎもよしや、よしあしと、なそなはれども、只ひとすぢに、こひ〳〵て、戀しきとりを、まつち山、待らん友に、あひ見んか、たまさかにあふとても、猶ぬれまさる、たもとは、ふるき言葉に、有明の、月がないたか、

ひとこゝろは、雲ゐのうちに、遊かしくも、あとに千こゝろやふく
むらん、やゝひろく、みちはさかふて、くさぐさの、しげるがう
へに、おく露の、こぼれてすゝはは、ながれなす、水にこゝろうつ
せり。

四季さま〳〵の、そのなかに夏は卯の花、白たへの、ゆきかとばかりよをふかみ、
まなびのまどに、むすぶ夢、

四季さま〳〵のそのなかに、夏は卯の花、は四時樣々なる其中で夏は卯の花がなり、卯月に咲く花なれば卯の花といふとも、また空木の花ともいふなり、白たへのは白栲とも白妙とも書き其色の白きより白きものゝ枕詞に用ゆなり、こゝは雪にかぶらせたるなり、ゆきかとばかりは雪であるかと一向思はるゝ位に卯の花の白きをいふ、よをふかみは夜の深さになり昔の歌にも、

「時わかずふれる雪かとみる迄に枝もたわゝにさける卯の花」

まなびのまどに、むすぶ夢、は學問する處の窓になり寢て夢を見る事。

さめてすゝしき、衣手に、かほりはたかき、たきものも、くみあはせたる、六ッの國それはことぐさ、これは又、十二にわかる、いとのねの、其なかばなるさうでうの、今此時にあふぎもよしや、

さめてすゝしき、は夢から醒めて涼しきなり、衣手に、かほりはたかき、は袖に薫りの強きなり、香ざの事にて今は匂ひといふ、たきものも、は燒物なり、沈香、檀香などの如きものなり、くみあはせたる六ッの國、之は香道として種々の香材をたきて、其香を嗅ぎ中つる枝あり、之れに用ゆる香の材は六つありて、六國香といふ、羅國、株蘇羅、眞名、晩眞、中蘇門答刺、伽羅にしてこゝは其事を云ひしなり、それはことぐさ、は其の香材は外國の事よとなり、これは又十二にわかる、いとのねの、足れは又十二に分れて居る絲の音のにて十二律の事をいふ、音樂の調子には、壹越、斷金、平調、勝絕、下無雙、鳧鐘、黃鐘、盤鏡、盤涉、神仙、上無の十二あり、之れをいひしなり、其なかばなる、さうでうの、は其十二律の半なる、雙調のなり、今此時に、あふぎもよしや、は今此時に扇

もよしやにて、之れは、音樂は自然の音を宮、商、角、徵、羽、の五つに分ち十二律を十二ヶ月に配當すれば雙調は半ばなれば六月に當り暑さの折なれば、此時に扇もよしと云ひ逢ふもよしとの意に寄せたり。

よしあしと、なはかはれども、只ひとすぢに、こひ〳〵と、戀しきとりをまつち山、待らん友に、あひ見んか、

よしあしとなはかはれども、はあしと云へば惡しと聞ゆるを厭ひて、よしと呼ぶにて蘆、葦と名は異なれど同じ草なりとなり、只ひとすぢにこひこひては只一筋に戀々てなり、戀しきとりを、は時鳥をなり、まつち山、は時鳥を待つといふ意を待ち山に寄せたり、待乳山は時鳥の名所なり、ほとゝぎすの處に註す、待らん友に、あひ見んか、は待つらん友にもし逢ふて見たらばなり。

たまきかに、あふとても、猶ぬれまさる、たもとゝは、ふるき言葉に、有明の月がないたか、ひとこゑは、雲ゐのうちに、ゆかしくも、あとに千こゑやふくむらん、

たまさかに、あふとても、猶ぬれまさる、たもとゝは、は稀に逢ふても逢ひながら一厨涙に袖の濡れまさる袂とはなり、ふるき言葉に、は昔の言葉になり、之れは昔の言葉に有といひ有明とつゞけたるなり、有明の月がないたか、ひとこゑは、は

「一聲は月がないたか時鳥」

とあるより取りたるにてまた昔の歌に

「ほとゝぎすなきつる方をながむればたゞありあけの月ぞのこれる」

などもあり、雲ゐのうちに、ゆかしくも、は雲井の中に行くといひ遊かしくと續けたるなり、あとに千こゑやふくむらん、は一聲鳴きたる時鳥の後に千聲も鳴きし如き餘韻の含むとなり。

やゝひろく、みちはさかふて、くさぐさの、しげるがうへに、おく露の、こぼれてすゑは、ながれなす、水にこゝろうつせり、

やゝひろく、みちは、は愈々廣く道は榮えてなり、さかふては假字誤れり、さかえてなり、道は七道をいふ、七道とは日本は古く東海道、東山道、中仙道、北陸道、山陰道、南海道、西海道の七道に後北海道をいれて八道とい

ふ昔の歌にも

「四つの海七つの道も我が君の御代ぞ治まる始めなりける」

などあり、即ち日本の國が榮えてなり、くさぐさの、は樣々のなり、しげるがうへに、おく露の、は繁る上に置く露にて上のくさ〳〵といひしより草の繁るにおく露といひしなり、こぼれてする、は、ながれなす、は溢れて末を流を成すなり、水にこゝろうつせり、は水に心を寫せりとなり。

春日詣

いにしへの、奈良のみやこの、八重がすみ、かすがの野べの、さをしかの、つのもいつしか、をちこちの、ゆきゝの人の、ながめぬる、なんゐんだうの、ふぢなみや、さかりは夏に、かゝりたる、その松がえの、ふりもよく、三笠の山や、雲ゐ坂、あめにこえ行、うば玉の、やみの螢か、きんすなご、さをさす舟の、佐保河に、かぜもすゞしき、すゞのねの、ふるのやしろの、神さびてけがれ心も、さる澤の、池にやどれる、月のかげ、むかしの人の、かたみぞと、見るやうねめがきぬかけし、柳も一葉ちる秋の、舟をたくみし、さゝがにの、そのふることを、おもひねの、枕にひゞく、とゞろきの、橋ふみならす、こまのあし、なくやすゞむし、くつは蟲、しりんきのかほも、三輪の里、いとくりかへすたまづさや、板屋にはしる、玉あられ、するゐは雪ともならざらし、さらせる〳〵、ぬのゝ白妙に、たえず〳〵、あゆみをはこぶなる、かすが宮の、たふとさはかくともつきじ、やまとことのは、

春日詣、

春日詣、とは大和の春日神社に參詣するといふ意なり、本文に註す、

いにしへの奈良のみやこの、八重がすみ、

いにしへの、はむかしのなり、往にし方といふ意なり、奈良のみやこの、は奈良は那羅とも寧樂とも乃樂、平猶とも書く大和國添上郡にあり、古へ京都に都の遷りし前に帝都の地たりしなり、故にいにしへの奈良の都といふなり、昔の歌にも、

「いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重ににほひぬるかな」

八重がすみ、は幾重も重りたる霞にて霞は春立つものなれば下に春日とあるにいひかけたるなり、八重櫻とあるを八重霞と云ひしなり。

かすがの野べの、さをしかの、つのもいつしか、をちこちの、ゆきゝの人の、ながめぬる、

かすがの野べの、は春日野をいふ、大和の國添上郡にあり、香栖にて鹿の栖む野といふ意なりと昔の歌に、

「春霞かすがの野べに立ちわたりみちてもみゆるみやこびとかな」

などあり、野べ、は野のあたりなり、さをしかの、は男鹿にて、さは發語ととつけたるまでなり和歌にていふ語なり、昔の歌にも、

「小男鹿の起臥分かず仕へ來て春日の野邊に秋も經にけり」

つのもいつしか、は角も何時の程にかなり、をちこちの、は遠所近所の、あちらこちらのなり、ゆきゝの人の、ながめぬる、は往來の人の眺めて見るなり、これは南都の八景として南圓堂の藤、佐保川の螢、猿澤の池の月、春日野の鹿、三笠山の雪、雲井坂の雨、東大寺の鐘、轟橋の行人とあるこゝは春日野の鹿をいひしなり、八景の事は播磨八景に註す。

なんゑんだうの、ふぢなみや、さかりは夏にかゝりたる、その松がえの、ふりもよく、三笠の山や、雲ゐ坂あめにこえ行、うば玉の、なんゑんだうの、ふぢなみや、は南圓堂の藤の花なり、八景の一なり、藤浪とは藤の花の風に援ぐは波の如く見ゆればいふなり、南圓堂は興福寺にあり、本尊は不空羅索觀音なり、藤原冬嗣、弘法大師と計りて、氏族繁昌を祈りの爲に之れを建立せり、其時春日明神、老翁に現はれ普新役人に混はりて工を助け給ひ、一首の歌あり、

「浦陀絡の南の岸に堂たてゝ北の藤なみ今ぞさかえん」

さかりは夏にかゝりたる、は盛りは夏にかゝるにて、藤の花の盛りは夏なれば夏にかゝると云ひ下の松が枝にかゝるとを續けたるなり、その松がえの、ふりもよく、は其藤の花のかゝる松が枝の、枝振りもよくにて、ふり、を雨の降りに見なして次ぎの笠に續くなり、三笠の山や、三笠の山は春日山になり、山の形美しかりしかば美笠山と云ひしを後三笠山とせしなり、昔の歌にも、

「名のみして山はみかさもなかりけり朝日夕日のさすをいふかも」

などあり雲ゐ坂は、雲井坂ともかく、轟橋の北にあり、昔の歌にも、

「村雨の晴間に越えよ雲井坂三笠の山は程ちかくとも」

などあり、あめにこえ行、は雨の降りたる時に越えて行くにて、雲井坂は上に註せし八景の一にて雨の名所なり、うば玉の、は闇を云はん爲の枕詞なり。

やみの釜か、きんすなご、さをさす舟の、佐保河に、かせもすゞしき、すゞのねの、ふるのやしろの、神さびてけがれ心も、さる澤の、池にやどれる月のかげ、

やみの釜か、きんすなご、八景の佐保川の釜をいひしなり、闇の釜か釜と見えしは金砂子となり、さをさす舟の佐保河に、は棹をさす舟の佐保河にて昔の歌にも、

「千鳥なく佐保の川ぎり立つぬらし山の木の葉も色まさり行く」

などあり、かせもすゞしき、すゞのねの、は風も涼しき鈴の音のにて、涼しきは上の佐保川の川風涼しきと、下の鈴の音の涼しきとにかゝるなり、鈴は振りて鳴すものなれば、鈴と云ひて、ふるとつゞけたるなり、ふるのやしろの、神さびて、は布留神社の古く神々しくなりてなり、布留の社は、石上郡にあり、祭神は常陸の鹿島と同體にて布都の御魂神社なり、神體の、十握劍は昔素佐之男命が出雲にて蛇を退治し給ひし時に用ひ給ひし御劍なり、崇神天皇の御代に山邊郡石上へ納め給ひしなり、また是地を布留といふは、昔此所の川に一つの劍流れ來りて物に觸るれば、何物も切れ石木と雖も破れ、洗濯せし賤の女の布に卷きつきて留まりければ、其所を布留と云ふなりと、けがれ心も、さる澤の、池にやどれる、月かげ、は汚れし心も猿澤の池

に宿れる月影にて、汚れ心も去るといふ意に猿澤の池といひかけたるなり、猿澤の池は天竺の獼猴池を寫したるより此の名ありといふ。

むかしの人のかたみぞと見るやうねめがきぬかけし柳も一葉、

むかしの人のかたみぞと見るやうねめが、は昔の歌に、

「猿澤の池の柳やわぎもこがねくたれ髪の形見なるらん」

などありて昔の人の形見であると見る所の妥女がにて、妥女とは、諸國司より美女を宮仕として奉れる人を云ふ、きぬかけし、柳も一葉ちる秋の、は衣掛柳をいふ、之れは、昔采妥にて殊に勝れて美しきがありて、人々多く云ひ寄り殿上人もよばひけれども、此妥女は帝を御思ひ奉りて他をば聞かず、帝は一度之れを御召しありて後絶えて見給はざりければ、妥女は痛く心を惱し遂に猿澤の池に至りて衣を脱ぎ岸の柳に掛け置きて池に身を投げたり、帝は何事も知ろし召さゞりしが、後聞かせ給ひて、哀れに思召され、こゝに御幸し給ひけり、其時の歌に柿本人丸、

「わぎもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき」

帝の御歌、

「猿澤の池もつらしなわぎもこが玉藻かつがば、水そこひなまし、」

とあり、其柳を衣掛柳と云ひ、枯れしを後人植ゑ添えしといふ、柳も一葉ちる秋の、は柳の葉も散る處の秋のなり、一葉と云ひしは「梧桐一葉の秋」とある句より云ひしなり。

舟をたくみし、さゝがにの、そのふることを、おもひねの枕にひゞく、とゞろきの、橋ふみならす、こまのあし、

舟を、たくみし、さゝがにの、は舟をつくりし蜘のなり、そのふることをおもひねの、は其故事を思ひつゝ寢るを云ふ、枕にひゞく、は枕に響く音の聞えたなら、とゞろきの、橋ふみならす、は踏み鳴すにて轟橋の往來人の響きなり、八景の一なり、こまのあし、は駒の足なり。

すゞむしくつは蟲、りんきのかほも、三輪の里、いとくりかへるたまづさや、

すゞむし、くつは蟲、は鈴蟲、轡蟲にて馬には鈴、轡のあるものなれば駒につゞけていひたるなり、りんきのかほも、三輪の里、りんき、は恪氣にて妬なり、

りんきのかほを見るに云ひ寄せて三輪の里をいひかけたるなり、三輪の里は上に註す、妹背山の淨瑠璃に、此里におみわと云ふ娘ありて淡海公に思ひをかけ、蘇我の橘姫と爭ひたる事あれば、りんきのかほを三輪といひしなり。

板屋にはしる玉あられ、ずゐは雪とも、ならざらし、さらせる〳〵、ぬのゝ、白妙に、たえず〳〵、あゆみをはこぶなる、

板屋にはしる、は板屋は處の名にて板家にいひかけたるなり、板屋は板にて作りたる家なり、はしる玉あられ、は露のしげくうつをいふ、ずゐは雪とも、ならざらし、は末は雪とも奈良晒なり、霰と云ひたるより、雪ともなると云ひ奈良晒の雪の如く白くなるにいひかけたるなり、さらせる〳〵ぬのゝ、は晒らせる布なり、晒すとは、布を白くする爲に水に洗ひ日に晒すを晒すといふなり、白妙に、は上に註す、たえず〳〵、は絶えず〳〵なり、あゆみをはこぶなる、は參詣するなり。

かすがの宮の、たふとさは、かくともつきじ、やまとことのは、

かすがの宮の、は春日神社をいふ、官幣大社にして祭神は四座、經津主命（香取神）武甕槌（鹿島の神）天兒屋根命、天照大神なり、初め香取、鹿島の二柱の神は天孫の天下ります前に荒ぶる邪神を服しに天下りましたるなり、鹿島の神は陸奥の鹽釜に下り給ひ、常陸の鹿島に止まりませしが後こゝを出でまして、大和の春日に至りましたるなり、藤原氏の祖神として中々勢のありし神なり、昔の歌にも、

「我をしれ釋迦牟尼佛世にいでゝさやけき月の世をてらすとは」

たふとさは、は尊さはなり、かくともつきじ、やまとことのは、は書くとも盡きじ、大和言の葉なり、大和の事に、言の葉とをいひかけたるなり、筆にて盡し難しとなり。

初若菜

小松原、末のよはひに、ひかれてや、君がためとて、野のあさとでに、年もわかなのむそひとつ、つむてふ春ぞ、かぎりなき、す

ざくの御賀に、ならふたる、まんざいらくや、がくゆうはん、けしきばかり、まひの袖、ためしすくなき、みあそびに、おの〳〵こゝろ、いれたまふ、まづそのえての人〴〵に、びははほたるの、ひやうぶきやう、たれにこがるゝ、名のゆかり、光る君には、きんのこと、おとゞはれいの、やまとごと、上手をつくし、たまへばぞ、いとゆふに社、きこゆなれ、その十二りつ、十三の、いとしをとこに、あひの手の、六段九段、人めの關、こゆるびやうぶの、すじめがた、すゝめいろどき、をのぶよを、君が手ことに、かけられて、曲の雲井の、すいちようにこゝろのをもて、うらなくも、あかしやすまの、うらみわび、人づてならで、その中を、わたせし橋の、長枕、はやかさゝぎに、いそかれて、わかれぐるまの波かへし、かへるなほしの、袖たもと、わりなき中の、わりづめや、みだれ亂るゝ、まごゝろを、しろしめさせ、給れと、後のあしたの、もしほぐさ、かいてり〳〵かしく、ちとせの松の、みどりの、ことぶきを、つきせぬ春と、祝しけも〳〵。

初若菜、

初若菜、は源氏物語の若菜の卷より取りたれば初若菜といふ。

小松原、末のよはひに、ひかれてや、君がためとて、野のあさとでに、年もわかなのむそひとつ、つむてふ春ぞ、かぎりなき、

小松原、末のよはひに、ひかれてや、之は源氏物語の歌に、

「小松原末の齡にひかれてや野邊の若菜も年を積むべき」

とあり、其の意は末遠き人の齡に引かれて我身も遥に年をつまんといふを若菜にかけて云ひしなり、小松原は小松の並び生へたる所、末の齡に、ひかれてや、は末遠き人の齡に引かれてなり、君がためとて、は君の爲と云ふ

てにて、昔の歌にも、

「君がため春の野に出でゝ若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ」

などあり、野のあさとでには野に朝早く出るをいふ、あさとでは朝早く戸を開けて出ると云ふ事なり、年もわかなのむそひとつは年を積むに、若菜の摘むを云ひかけたるなり、年も若菜の六十一つにて、つむてふ春ぞかぎりなき、はつむといふ春ぞ限りなく芽出度しとなり。

すざくの御賀にならふたる、まんざいらくやがくはうおん、けしきばかり、まひの袖、

すざくの御賀にならふたるは朱雀院の六十一の祝ひに習ひたるにて之は朱雀院の六十一の賀に習ひて、源氏の君の四十の賀をせられしを云ふ、まんざいらくやがくはうおんは萬歳樂やと、賀皇恩にて、何れも芽出度き舞なり、けしきばかりまひの袖は、一寸舞ひたる事を云ふ。

ためしすくなき、みあそびに、おの〳〵こゝろいれたまふ、まづそのえての人々に、

ためしすくなき、みあそびに、はこれ迄例の少ない盛な御遊びになり、おの〳〵こゝろいれたまふは各心を入れ熱心なるを云ふ、まづそのえての人〳〵には先づ其得手、得意の人々にはなり。

びははたるのひやうぶきやう、たれにこがるゝ、名のゆかり、光る君には、きんこゆなれ、

びははたるのひやうぶきやうは琵琶は螢の宮兵部卿の宮が彈かれしなり、たれにこがるゝ名のゆかりは螢とは一たい離れに焦れるからの縁で左樣な名の付きしかとなり、光る君にはきんのことは光る源氏の君には琴を彈かれしとなり、上に螢といひしより光と對をとりしなり、おとゝはれいのやまとごとは致仕大臣の和琴を彈かれしをいふ、大臣は例の和琴となり、上手をつくしたまへばぞは上手を盡し給へばなり、いとゆうに社きこゆなれは誠に優に上品に聞ゆるなりとなり。

その十二りつ、十三の、いとしをとこに、あひの手の、六段九段、人めの關、

その十二りつは其の十二律にて十二の調子をいふ此事はこゝろの奥に註す十三のいとしをとこには箏は十三の絃を張りたれば十三の糸と云ひいとしとつゝけたるなりいとしをとこには可憐し慕はしき男になり、あひの手のは可憐し男に逢ふと云ひ合ひの手と直ちにつゝけたるなり、合の手とは歌と歌との合ひに歌はずして彈く丈の所を云ふ以下曲に縁のある言葉を用ひて文なしたり六段九段は曲の合の手の一切りを一段とす六つ重りたるは六段九つ重りたるは九段といふこゝは幾重のといふ意にて下の人めの關にかゝるなり人めの關は人の見る目にて隔てとなるを人目の關と云ひたるにてかさのうちの處に註す。

こゆるびやうぶのずゝめがたずゝめいろどきしのぶよを君が手づとにかけられて曲も雲井のすいちやうに、

こゆるびやうぶのずゝめがたは越える屏風の雀の齒となりずゝめいろどきは黄昏時夕暮れなりしのぶよをは忍ぶ夜をなり君が手づとにかけられては君が手綜に掛けられてなり手づとは合ひの手の中にて最も重なる手をいふ曲の縁語にいひかけたるなり曲も雲井のすいちやうには曲も雲井の翠帳にて雲井とは調子の名に粹な調子といふ意を寄せたり。

こゝろのおもてうらなくもあやしやすまのうらみわび人づてならでその中を、わたせし橋の長枕はやかさゝぎにいそがれて、

こゝろのおもてうらなくもは心の表裏なくもにて隠す事のなきをいふ、表裏は翠帳の縁語なり、あかしやすまのうらみわびは明石や須磨のにて、裏なくつゝみなくと云ひたるより明かすに明石とつゝけたり、うらみわびは恨み侘び堪かねてなり、明石須磨と云ひたるより浦に恨みをいひかけしなり、人づてならでその事を人の傳へでなくして直接に其中をなり、其の中は男女の中なり、わたせし橋の長枕長枕は二人寐に用ゆる長き枕にて枕を橋に見て人づてならで渡せし橋といひ、次ぎのかさゝぎの橋にかくるなり、はやかさゝぎにいそがれてはは七夕の事をいふ、早や鵲に急がれてなり、七夕の夜には、天の二星相逢ふに鵲が橋をなすといふ支那の

傳説より取りたるなり。

わかれぐるまの、波がへし、かへるなほしの袖たもと、わりなき中の、わりづめや、わかれくるまの、波がへし、は分れる折の車の波がへしとなり、かへるなほしの袖たもとは直衣の袖の翻るをいふ、直衣は常に着る服なり、わりなき中のは割りなき、親密なる中のにて、わりづめやは袖の縁語を用ひたるなり。

みだれ亂るゝ、まごゝろを、しろしめさせ給れと、後のあしたの、もしほぐさ、かいてらし、

みだれ亂るゝは亂れみだるゝなり、まごゝろをは眞心を、しろしめさせ給れとは知り給へとなり、後のあしたの、とは後朝を云ふ上に註す、もしほぐさは藻鹽草、にてかくの枕詞なり後朝の文を書となり、かいてらしは書いて參らせ候にて、しは女の手紙の終りに書く詞、かしこといふ詞より轉じたるにて畏れ多しといふ意なり。

千とせの松の、みどり子に、かへるこよみの女文字、とるなるひらく、吉日や、猶末廣のことぶきを、つきせぬ春と祝しけも〳〵。

千とせの松の、は千年も齢を保つ松のなり、みどり子に、は松のみどりは松の新芽をいふ、松のみどりに嬰子とをいひかけしにて、六十一年目には生れし年と同じ暦に立ち歸るなれば、みどり子にかへる暦といひしなり、かへるこよみの女文字は上に註す、とるなるひらく吉日や、は暦の吉日に取る、成る開く、などあるをいひしなり、猶末廣のことぶきを、は猶其の上に末廣く、目出度き事をなり、つきせぬ春と祝しけも〳〵、は限り盡きなく、いつ迄もつゞく、春と祝ひ納めんとなり。

絲の戀

いとによる、ものならなくに、わが心、ほそきは女の、つねに、いのりし神は、御すいもじ、を、中立に、むすびあふたる、ねやのうち、とけてはもつれ、もつれては、とけいの六つに、む

つごとも、つひいひさして、きぬ〳〵に、見おくるがさの、もみちより、ふかく染にし、袖のあめ、ふるごとまでも、くり返し、しんきしんくの、世の中がきを、いつしかあけてそはばやと、おもひ〳〵の、つもるおだ巻。

絲の戀。

絲の戀は絲に寄せる戀といふ意にて、絲に寄せて、戀の事を延べしなり、其れ故絲の縁語を多く用ひたり。

いとによるものならなくに、わが心、ほそきは女の、つね〳〵に、

いとによるは絲に槎り合すなり、ものならなくにはものでないのになり、之れは昔の歌に、

「絲によるものならなくに別れ路の心細くも、おもほゆるかな」

とあるを取りたるにて、絲は細く槎り合したるが絲に槎れるものでないのになり、わが心ほそきは女のは我が心の心細きは女のなり、細きは我心、心細き事をいひたるなり、つね〳〵には普通になり、心細きは女の普通と云ふ意と平生と云ふ意とを掛けたるなり。

いのりし神は、御すいもじ、〳〵を中立に、むすびあふたるねやのうち、

いのりし神は、祈りたる神はにて、祈るは身を齋み清めて申すといふ意にて、神佛に請願する祈禱なり、御すいもじは御推量の義、〳〵を、中立には手紙を中立にして双方の意を通じてなり、むすびあふたるねやのうちは結び逢ひたる閨の中なり、結ぶと云ひて絲に縁ある語を用ひたるなり、

とけてはもつれ、もつれては、とけいの六つに、むつごとも、

とけては、は解けてはなり、上の結びを受けて、絲の結び目のほどけたる事に云ひかけて打解けて逢ひたるなり、もつれは縺れ經綿と入り亂れ、むすぼるゝ事なり、絲の縺るゝに云ひかけて、所謂口説の出來たる事なり、もつれては、は縺れてはなり、とけいの六つには、はもつれてはを受け、解けの意に寄せて時計と續けたるなり、時計とは支那にて方角やら、時を測る磁計を土圭と云ひたるが轉じて時刻を計るものを時計と云ふ樣になりたるなり

今の時計は慶長年間に西班牙より渡りたるものなり、六つは卯、酉の刻にて日出、日沒の時なり、日出を明六つと云ひ、日暮を暮六つと云ふなり、むつごともは陸言にて男女の私め語なり、時計の六つに、むつごとを云ひ寄せたり。

つひいひさして、きぬ〳〵に見おくる、かさの、もみぢより、ふかく染にし、袖のあめ。

つひいひさして、きぬ〳〵には一寸云ひかけて、朝の別れとなり、きぬ〳〵は後朝と書男女共に寢たる翌朝各の衣を着て別るる、衣衣の意なり、見おくるはきぬ〳〵の別れに歸り行く人を見送るなり、かさのもみぢより蛇の目の雨傘を紅葉傘といふ其れを紅葉に見て色ふかくといひしなり、ふかく染にし、袖のあめ、袖の雨は涙の袖ぬらす事なり、かさの紅葉の色より も猶深く身にしむ涙となり、紅葉の色と云ふより深く染めるといふ。

ふることまでもくりかへし、しんきしんくの、世の中がきを、いつしかあけてそはばやと、思ひ〳〵のつもるをだ卷、

ふることまでもくりかへし、は雨をいひたるなり、降るといひ、ふることゝ續けたるにて昔のすぎし事までも思ひ出してなり、しんきしんくは辛氣辛苦となり、上に紅葉とあるより、辛苦に眞紅をいひかけたるなり、世の中がきを、は辛氣な世の爲に隔てらるゝ男女の中垣となり、世の中といふ事は、男女の中をいふいつしかあけて、はいつしか早く、公然になり、そはばやとは添度きものよとなり、おもひ〳〵のはつもる、互ひに思ふ思ひの積り重なる、をだ卷は、をだ卷は絲を卷き付け置くものなれば、積ると云ひ思ひの積ると絲の積ると云ひかけたるなり。

西行

われもむかしは、ますらをの、まゆみつきゆみ、としをへて、ひきたかへたる朝夕は、命なりけり、たび衣、こけのころもに、身をそめかへて、心のちりの、袖はらふ、やぼなせかいに、いとし

ごの、いとしかあいは、むかしのことよの、よし野山、こそのしをりの、みちかへて、まだ見ぬ花の、いろ〳〵を、たづね〳〵て、うた枕、筆のすさみの、すみぞめ櫻、うつろふ春の、花のかほ、やせるすがたに、傘きたなりを、水のかゞみに、かげとめて、しばし立よる柳かげ。

西行。

西行とは西行法師の事なり、元は佐藤義清といひ、鳥羽上皇の北面の武士なり、義清は田原藤田秀郷の子孫にして、代々名高き武家に生れ、勇敢にして、武藝に秀で、兵法にも通じ、且つ和歌を好くせり、されば上皇の御覺えも目出度く左衛門の尉に任ぜられ、甚だ時めきしが、少しも榮利を喜ばず、常に出家遁世の志絶えず、ある日其の一族なる憲康と倶に宮中に朝し、又翌日も同じく登らんと約束し置き、其の時刻に至れば、憲康は死去せるにぞ世の無常を覺り上皇に至り官を辭せんと請ひ奉れど其の才を惜ませられて許されず、義清家に還れば、四歳なる其の女喜びて父を迎ふ、義清心にこれを惻みしが、緣の絆の斷つは是れよりぞと思ひ、其女を蹴飛ばして泣くも顧みずして立ち去り、嵯峨に往き髮を削りて僧となり、圓位といひ又西行といふ、人の一生の幾ばくもなく、來世遲きに在りとて、これより日本國中至らざる所なく、行脚して嘯咏自適して一生を暮せり、この琴歌は西行法師の自詠の歌をもとゝして作りたれば、西行と名づけたるなり。

われもむかしは、ますらをの、まゆみつきゆみ、としをへて、ひきたがへたる朝夕は命なりけりたび衣、こけのころもに、身をそめかへて、

われもむかしは、ますらをの、われも背は益荒男のにて、ますらをとは男子の事にて強き意なり、之は昔の歌に、

「今こそあれ我れも昔は男山北のさかりもありてしものを」

とあるを取りたるなり、西行が武士なりしを云ふなり、初に註す、まゆみつきゆみ、としをへて、は眞弓、槻弓年を經てなり、眞弓は檀の木にてつくりし弓にて、つき弓は槻の木にてつくりし弓をいふ、ひきたがへたる朝夕は、は

引き違へたる朝夕はなり、之は上の弓を受けて、弓を引くものなれば引きと續けたるなり、世の中の思ひに違べる事にて西行が世の中引き違へて出家せる事を云へり、命なりけり、は命であるよとなり、之は昔の歌に、

「年たけてまたこゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山」

とあるを取りたるなり、たび衣、は旅する時に着る衣服をいふ、苦の衣、は出家の衣にて、苦の衣とは出家仙人などの着る衣をいふ、昔の歌に、

「世をそむくこけの衣はたゝひとへかさねばうとしいざふたりねん」

などあり、そめかへて、は僧衣は墨染衣といふより、僧衣を着る事を染かへてといふなり、西行が旅する時は出家して僧衣なれば、旅衣も僧衣にしてとなり。

心のちりの、袖はらふ、やぼなせかいに、いとしごの、いとしかあいは、むかしのことよの、よし野山、

心のちりの、袖はらふ、袖で拂ふにて、心の汚れ俗塵を法の袖にて拂ふとなり、やぼなせかいに、は不粹な世界になり、いとしごの、いとしかあいは、むかしのことよの、は可愛ゆき子の、可憐し可愛は昔の事なりとなり、昔の事よと云ひたるよりよしの野と續けたり之は西行が昔は武士なりしも世の中の引き違へたる事により出家して旅衣僧衣となりたるには世の俗塵心の汚れを拂ひたれば子供の可愛と思ひしは昔の事にて出家しては執着を斷ちしとなり、西行は初めに註す、吉野山、は大和國吉野郡にあり、櫻雪の名所にして西行此地に遊びて、

「吉野山かすみの奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり」

と云ふ歌を詠みたる事あり。

こそのしをりの、みちかへて、まだ見ぬ花の、いろ〳〵を、たづね〳〵て、うた枕筆のすさみの、すみぞめ櫻、

こそのしをりのみちかへて、之は西行法師の歌に、

「吉野山こそのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん」

とあるを取りたるなり、こそのしをりの、は栞りといふ事にて、枝折とも書く、山に分け入る時に歸る折或はまた來る時の道導べに枝

を折かけ置くをいふ、昔の歌にも、

「ふみわたる我れよりさきの跡を見ば雪ぞ山路の栞ならまし」

などあり、みちがへては道を違へてなり、まだ見ぬ花のいろ〳〵をは未だ見ぬ花の樣々をにて、去年の道導べしたる道をかへて去年見ざりし所の未だ見ぬ花のいろ〳〵をなり、たづね〳〵ては尋ね〳〵てなり、うた枕は歌枕にて和歌の枕言に詠む名所をいふ、たとへば、櫻と云へば吉野とか、霞と云へば淺妻といふ、この吉野、淺妻の如し、筆のすさみのは筆のなぐさみのにて心の荒びてする戯みなり、昔の歌にも、

「見るたびに老の涙をそゝぐかなむかしの人の筆のすさびに」

などあり、すみぞめ櫻は歌に、

「深草の野邊のさくらこゝろあらば今年ばかりは墨染に咲け」

とあるより云ひたるなり、之は西行法師の僧となり墨染衣に云ひ寄せたるなり、西行が出家して旅行し吉野山など所々の歌枕など探遊したるを云ふなり。

うつろふ春の花のかほ、やせるすがたに笠きたなりを、水のかゞみに、かげとめてしばし立よる柳かげ、

うつろふは花の色の退めるにて散る事なり、春の花のかほは春の櫻花の色退めしが如く西行の盛り過ぎしをいふ、やせるすがたに笠きたなりをは痩せたる姿に笠をきたる形をして西行の菅笠を持てる旅姿を云ひしなり、水のかゞみにかげとめては水の鏡に影を止めてなり、しばし立よる柳かげ之は西行法師の歌に、

「道のべに清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりけり」

とあるをとりたるなり、しばし立よる柳かげは、一寸立ち寄り休む柳の下影となり。

手枕

きゝなれし、いとの色音を、松かぜに、それとばかりの、こゑさへあるを、鹿がさそへば、をばながへんじ秋はなぜやらたが

袖も、ぬるゝならひか、かはかぬくせか、あぢにさだめた、むかしおもへば、しんぞしんきじやヱ、おもかげしたふ、たまくらに、むすびすてたる、つゆの夢、きえて殘りて、そのすへはまだあかつきの、おきてもねても、かぎり名ごりのをしまれし、月の入山、にしとながめん。

手枕

たまくら、とは肱を枕にする事なり、服格なる時又は落付きて寢る時はせぬものなり、故に此歌にも、「おもかげしたふたまくらにむすびすてたる、つゆの夢」とあるを取りて名づけたるなり。

きゝなれし、いとの色音を、松かせに、それとばかりの、こゑさへあるを、きゝなれし、いとの色音を、は幾度も聞きて、耳馴れたる絃の音ざしをにて、いとは琴や三味線の音を云ふ、松かせに、それとばかりの、こゑさへあるは、は松風の音に、絃の音と思ふ計りの聲さへあるをなり、其れかとばかりは絃の音色とばかりなり、昔の歌にも、

「琴の音や松ふく風に通ふらん千世の例にひきつべきかな」

などあり、秋になりて絃の音色の樣に聞ゆる松風の淋しき聲さへ聞ゆとなり。

鹿がさそへば、をばながへんじ。

鹿がさそへば、をばながへんじ、は鹿が鳴き尾花の風に音するを面白く云ひたるなり、古くはしかとは牡鹿の事にて牝はめかと云ひしなり、尾花は花薄の事なり。

秋はなせやらたが袖も、ぬるゝならひか、かはかぬくせか、

秋はなせやら、たが袖も、は秋は何故やらん誰れが袖もなり、ぬるゝならひか、かはかぬくせか、は濡れる習はせか、かはかぬ癖であるかとなり、秋は物悲しくて涙に袖の濡るゝ事を云ひしなり。

あぢにさだめた、むかしおもへば、しんぞしんきじやヱ、

あぢにさだめた、むかしおもへば、は趣きのある樣に定めた其昔を思ふと

なり、過ぎし方を思ふとなり、昔はあぢにさだめた昔と云ひ過ぎし方と云ふ意に續けたるなり、しんぞしんき、は眞に辛氣なり、しんきじやエ、は辛氣なるよとなり、辛氣は氣の結ぼるゝこと、じれつたきなり。

おもかげしたふ、たまくらに、むすびすてたる、つゆの夢、

おもかげしたふ、たまくらに、は、俤慕ふ手枕にて、俤は面影、姿の事、戀しき人の姿を慕ひつゝ、手枕して寢ねたるなり、むすびすてたる、つゆの夢、は結び捨てたる露の夢にて、手枕は一寸寢る時にするものなれば一寸轉び寢に結びたる露の間の夢となり、結びと云ひたるより露と續けてつゆの間と云ふ意に云ひたり。

きえて殘りて、そのすへはまだあかつきの、おきてもねても、かぎり名ごりのをしまれし、月の入山、にしとながめん、

きえて殘りて、そのすへは、は消て殘りて其末はにて、露と云ひたるより其緣語を用ひ夢の醒めるを消えると云ひしなり、手枕に俤慕はしき人の夢を見て、夢のさめし後もなり、まだあかつきの、おきてもねても、は未だ曉の起きても寢てもなり、かぎり名ごりのをしまれし、限りなき名殘の惜しまれしなり、月の入山、にしとながめん、月の入山を西と眺めんにて、夢醒めし後も名殘惜しまれて月の入西の方をつく〳〵と眺めるとなり。

新七草

いにしへの、よしある人の、秋の野に、かそへし花の、いろ香にも、いづれおとらぬ、をとこへし、さかりひさしき、りんだうに、つきの野ぎくの、千代かけて、ちぎるえにしは、きちかうに、なびくしをんの、やさすがた、のちは心も、かるかやと、われからはづる、われもかうよむ花かづも四ツと三ツ、むつましどしの、うちつれて、見るこそ人の花なれや。

新七草、

新は、あたらしき事にて、七草とは七種の草花をいふ、秋の七草とて萬葉集

の歌に、

「秋の野に咲きたる花を指折り掻き數ふれば七種の花、芽出花、葛花、嬰麥之花、姫部志又藤袴朝顔之花」とあり今は朝顔の代りに桔梗を加ふ、之は千種の多かる中にて花の優れて秋野の眺を添ふる七種の草花を稱せしなり、其れに准へて其の以外にて猶めでたき七草をこゝに稱へしにて、從來の七草に對して、新七草と云ひしなり。

いにしへの、よしある人の秋の野に、かぞへし花の、いろ香にも、いづれおとらぬをとこへし。

いにしへの、は昔のなり、去し方の意にて、同じ事にても昔は向方にて、古よりは近きなり、よしある人の、秋の野に、かぞへし花の、由緒ある人が秋の野でなり、數へ上げたる花のにて、秋の七草を云ふ、初めに註す、いろ香にも、は艶香にもにて、色は花の美しきを云ひ、香とはかざしなり、いづれおとらぬ、はどちらも劣らぬなり、をとこへし、

さかりひさしき、りんだうに、

さかり、は盛りにて花の滿開なり、ひさしき、は久しきにて、花の早く散らぬなり、りんだうに、は龍膽にて、りうたん、たつのはぐさ、ゐやみぐさ、にがなとも云ふ、

つきの野ぎくの、千代かけて、ちぎるえにしは、きちかうに、

つきの野ぎくの、は菊の事を云ひしなり、月夜野邊に咲ける野菊のなり、千代かけて、は菊は萬木の霜枯れし後も猶依然と美しく花の咲くを千代もかける久しき意なり、菊と云ふ名は支那より來たる音を其まゝ用ひたるなり、かはらよもぎと云ふ古くは、くゝといひしなり、秋草の花、節花、傳公、延年、白花、日精、更生、陰威、朱厲、女花など云ふ、此花はおそく咲きて霜に枯れぬを晩節を保つと云ひ、君子に比し、菊に綿を被せて(九月九日)露に濡し、菊の露を呑めば千歳の齢を延ぶと云ふ、昔の歌にも、

「ぬれきぬと人にいはすな菊の露よはひのぶとぞわがそぼちつゝ」

などあり、ちぎるえにしは、きちかうに、桔梗の中を云ひしなり、契る縁は桔梗のと云ひかたきといひかけしなり、契るは夏やせに註す。

なびくしをんの、やさすがたのちは心も、かるかやと、

なびくは、裄え延くの意なり風に從ひて撓み延ぶ事にて他の意に從ふ事なり、やさすがたは、優しき姿なり、しをんはしをにとも云ふ、のちは心も、かるかやとは後は心も刈萱とにて、かるかやと云ふより魏る意に寄せて云ひたるなり、秋刈り取る芽と云ふより名の意起りたるなり。

われからはづる、われもかうよむ花かずも四ッと三ッ、むつましどしの、うちつれて、見るこそ人の花なれや、

われからはづるわれもかう、此度は割帽額の事なり、われもかうのわれを我れに見て、上の刈萱を受けて、魏る事を我れから恥づるわれもかうと云ひたるなり、よむ花かずも四ッと三ッ、はよむ花の數も四ッと三ッとにて以上の七草なればいふ、むつましどしのは睦まし同志のにて、四つ三つと云ひたるより睦つましと云ひ六つと云ひかけたるなり、うちつれては打連れ立ちてなり、見るこそ人の花なれやは扨其花を見るこそ人の樂しみなりにて人世の花なりとなり。

なでしこ

ことは花のおほかる野べの春秋をへだてし今は、中そらやてるひに匂ふ、からやまと、花のにしきの、とこなつは、げにたぐひなき、よそほひ、くれなゐのこぞめの色に、おきわたす、あしたは露の、玉すだれ、かけてぞいのる、神がきの、しるしなるらん、ひめゆりも、ひもときそめて、なびきつゝ、むつれむつるゝ、手枕に、かほりのこして、名はたち花の、かげにやとるか、ほとときす、あけてわかるゝ、ちぎりはほんに、するひさかたの、雲のそで、ひく手もしげき、あやめ草、ことによしある、言の葉の、かたりもつきぬ、はゝこぐさ、かれぬさかへをうつしてうゑて、さかりひさしき、宿の撫子。

なでしこ

なでしこ、

撫子の花のことを云ひたるなり、本文に註す、

こと花の、おほかる野べの春秋をへだてゝ今は、中ぞらや、てるひに匂ふ、からやまと、花のにしきの、とこなつは、げにたぐひなきよそほひ、

こと花の、おほかる野べの春秋を、は殊に美しき、花が多くある野の邊りの年月をなり、へだてゝ今ぞ、中ぞらや、は隔てゝ年月の經ちてなり、いまぞ中ぞらやは、今は中空やにて下の日につゝくなり、てるひに匂ふ、は光り輝く日に匂ふにて匂ふは色の美しくほのめくなり、から、は外國、やまと、は日本、次ぎの錦にかゝるなり、花のにしきの、とこなつは、は花の錦の樣に美しき常夏になり、常夏は撫子の一種にて、春より秋にかけて咲けば常夏といふ、げにたぐひなきよそほひ、は誠に類ひの無い裝ひ、かざりとなり、昔の歌にも、

「塵をだにたてじとぞ思ふ咲きしよりいもとわがぬるとこなつの花」

くれなゐのこぞめの色に、おきわたす、あしたの露の、玉すだれ、かけてぞいのる

神がきの、しるしなるらん、

は香を殘してなり、名はたち花の、は橘と云ふより浮名の立つに云ひ寄せたり、名は橘のなり、かげにやどるか、ほとゝぎす、は橘の蔭に宿をかる時鳥となり、橘の事は夏の處に註す。

あけてわかるゝちぎりはほんに、するひさかたの、雲のそで、ひく手もしげきあやめ草、

あけてわかるゝ、は夜の明けて別れるなり、ちぎりはほんに、は契りは誠になり、上に手枕と云ひしより契りと云ひしなり、するひさかたの、雲のそで、は行末の久しきなり、久方は雲の枕詞なり、雲のそで、雲の袖なり、ひく手もしげき、は引手も繁きなり、あやめ草、は草なり菖蒲の事なり。

ことによしある言の葉の、かたりもつきぬ、はゝこぐさ、かれぬさかへを、うつしてうゑて、さかりひさしき、宿の撫子、

ことによしある言の葉の、は殊に由緒のある言葉の、かたりもつきぬ、は語りも盡きぬなり、はゝこぐさ、は母子草にて御形の事なり、正月の七種の一

なでしこ

つなり、かれぬさかへを、うつして、うゑて、は枯れざる榮えをうつし植てな り、さかりひさしき宿の撫子盛り欠しき宿の撫子なり。

山田流 琴歌詳解 終

不許複製

明治四十四年十二月廿八日印刷
明治四十五年一月一日發行

山田流 琴歌詳解
定價金五十錢

著作者 井上民子
發行者 增田義一 東京市京橋區南紺屋町十二番地
印刷者 渡邊八太郎 東京市牛込區榎町七番地

發行所 東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話 京八七四、八七五、八七六
郵便振替貯金口座參貳六番

印刷所 日清印刷株式會社

松葉靜和女史著

▲造花實習

大全一冊版　正價六拾錢　郵稅八錢

本書は在來の煩雜なるを避け極めて簡易なるものより漸く複雜なるものに入るの順序依り一實物に付きて極めて丁寧に說きたるものにして猶ほ挿繪を添へたるが故に如何なる初學の人と雖も容易に習得し得る名著なり。

島田理鶴翁述

▲挿花の栞

大版箱入　頒美本　正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

草花自然の美を一堂に收むるは挿花の特技なり。而して古來斯の道に付秘訣と稱し多其の要を敎ふるを喜ばざりしが今島田翁は忌憚なく是等の秘竅を本著に說かゝ、挿花に志すものは是非一讀す可き名著也。

下田歌子女史著

▲婦人禮法

五版　大版上製　箱入美本　正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

男女を問はず何人も心得可きは禮法なり。然るに我が國には洋式多く混入して種々の場合何れに進ず可きか迷はざるもの少なし。下田先生本書に於て詳しく諸種の場合に當する方法を說かゝ、故に萬人是非一讀以て失なからんとを期せられよ。

實踐學校長谷川講師上村兩君著

▲刺繡獨習書

三版　大版正價冊五錢　全一冊郵稅六錢

本書は獨習者のために特に兩先生の著されたるものにして說明懇切なる手もゞ導く、が如く口以て敎ふが如し、而て猶足らざる所は挿圖を添へたれば如何なる初步の人と雖獨習し得る良著也。

實業之日本社發行圖書總目錄

◉史傳地理

農法學博士新渡戸稻造君序　山方香峯君著
◉十大德敎家傳　大版上製美本　正價貳圓　書留小包十八錢

若宮卯之助君
◉米國史　大版上製金文字入　正價壹圓七十錢　郵稅拾貳錢

ルーズヴエルト原著　法學士遠山照君山崎梅處君共著
◉偉人クロムウエル　大版上製金文字入　正價　郵稅壹錢四錢

農法學博士新渡戸稻造序　山方香峯君著
◉新武士道　大版金文字入　正價　郵稅壹圓八錢

岡三郎翁著
◉新編武士道實話　上製金文字入　正價　郵稅八拾錢

山方香峯君著
◉一國一人近世人家傳　上製金文字入　正價　郵稅八拾錢

山方香峯君著
◉世界人豪の片影　中版全一冊　正價　郵稅五拾錢六錢

報知新聞記者佐瀨醉樵君著
◉當代の傑物　上製金文字入　正價　郵稅六拾錢八錢

實業之日本記者石井白露君著
◉最近米國成功十傑　全一冊美本　正價　郵稅五拾錢六錢

福田琴月君著
◉偉人の少年時代　上製金文字入　正價　郵稅六拾五錢八錢

中野觀象君著
◉最新外國商業地理　大版上製金文字入　正價五拾五錢　郵稅八錢

宮田千年君著
◉世界商業史綱　大版上製金文字入　正價　郵稅六拾錢八錢

大阪伯序　福田琴月君新著
◉世界偉人傳　大版全一冊　正價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢

加藤政之助君著
◉滿洲處分　大版全一冊　正價　郵稅廿五錢六錢

長谷川宇太治君著
◉渡清案內　中版全一冊　正價　郵稅廿五錢四錢

市吉徹夫君著
◉地理と商品　中版全一冊　正價　郵稅廿五錢四錢

大阪伯序　三宅有賀田中館博士追懷文　藤田斬雲君著
◉天下の記者　大版全一冊　正價　郵稅五拾錢八錢

鈴木光次郎君著
◉現代百家名流奇談　中版全一冊　正價　郵稅四拾錢

桑谷克堂君著
◉成功秘訣富豪の面影　全一冊美本　正價　郵稅五拾錢六錢

實業之日本社編輯 ●日本富豪の家風 全一冊 正價五拾錢 郵税六錢

京都大學圖書館員 佐竹義繼君編 ●幕末勤王烈士手翰抄 上製 金文字入 正價壹圓五十錢 郵税拾貳錢

前カラチン女學堂教頭 一宮操子女史著 ●豪古土産 大版上製 金文字入 正價八拾錢 郵税八錢

◉經濟産業書類

專修學校法政大學教師法學士 工藤重義君著 ●經濟財政要義 大版上製 金文字入 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢

米國エクルストン氏著 蘆川忠雄君譯 ●處世經濟法 中一冊版 正價廿錢 郵税四拾錢

米國イリー博士 クキッタアー博士共著 ●經濟學提要 大版上製 金文字入 正價壹圓 郵税八錢

米國センクス博士原著 別府壮太郎君譯述 ●産業合同論 大版上製 金文字入 正價八拾錢 郵税八錢

商業學士小林行昌君 土屋長吉君共著 ●中等經濟學 大版一冊版 正價四拾錢 郵税六錢

土屋長吉君著 ●應用經濟學 大版一冊版 正價四拾錢 郵税六錢

淺井藤一倪君著 ●最新農業經營 大版一冊版 正價四拾五錢 郵税六錢

宮入良右衛門君著 ●經濟的育蠶法 大版一冊版 正價廿五錢 郵税六錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯 ●富の福音 洋裝一冊 正價四十錢 郵税六錢

川上善兵衛君著 ●葡萄提要 大版上製 金文字入 正價壹圓錢 郵税拾貳錢

法學博士 天野爲之君新著 ●經濟策論 菊版上製 金文字入 正價貳圓四十錢 郵税小包十八錢

◉衛生書類

醫師武藤喜作君著 ●家庭應急手當法 中一冊版 正價四拾錢 郵税六錢

報知新聞記者 中村木公君著 ●名家長壽實歷談 中金文字入版 正價八拾錢 郵税八錢

東京朝日新聞記者 杉村縱橫君著 ●肺病全快談 中一冊版 正價五拾錢 郵税六錢

農業博士 玉利喜造君著 ●冷水浴の實驗と學理 中一冊版 正價廿五錢 郵税四錢

萬朝報記者 中島氣峰君著 ●禁酒禁煙の五年間 大一冊版 正價廿五錢 郵税四錢

醫學博士加藤照麿君校閲 西谷龍麟君譯著 ●最新育兒法 全一冊 正價七拾錢 郵税六錢

英國ノールソン著 海獄生譯 ●思想健全法 中一冊版 正價四拾錢 郵税四錢

蘆川忠雄君著 ●心機轉換法 中一冊版 正價廿五錢 郵税四錢

英國グランヴヰル博士著 海獄生譯 ●簡易安眠法 中一冊版 正價廿五錢 郵税四錢

英國グランヴヰル博士著 海獄生譯 ●神經健全法 中一冊版 正價廿五錢 郵税四錢

蘆川忠雄君著 ●頭腦明快法 中一冊版 正價廿四錢 郵税四錢

英國グランヴヰル博士著 蘆川忠雄君譯 ●最新記憶法 中一冊版 正價廿五錢 郵税四錢

◉商業實務書類

實業之日本社編 ●實業の日本 生十二ケ月 袖珍 正價貳拾錢 郵税四錢

金澤商業學校長中野觀象君編 ●實用商業文練習帖 和本罫字 正價六拾錢 郵税四錢

土屋長吉君著 ●商戰必勝 中一冊版 正價廿五錢 郵税六錢

土屋長吉君著 ●商工執務法 大一冊版 正價五拾錢 郵税六錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯 ●實業の鍵 大一冊版 正價廿五錢 郵税六錢

前金澤商業學校長 永野耕造君著
●商業修身訓 上中下三冊 正價四拾五錢 郵稅八錢

中野觀象君著
●實用商業書信文範 大一冊版 正價四拾錢 郵稅八錢

商業學士 小林行昌君著
●英文商用文教科書 大版上製金文字入 正價四拾五錢 郵稅六錢

カーネギー翁著 小池靖一君譯述
●實業の帝國 附カ翁評傳錢 正價廿五錢 郵稅廿六錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯
●富の福音 洋一冊裝 正價四拾錢 郵稅八錢

男爵前島密君序 澤村菊池兩君共著
國民實業指針 大一冊版 正價五拾錢 郵稅八錢

藤岡秀太郎君著
●商品と其荷造法 大一冊版 正價五拾錢 郵稅六錢

惣崎良夫君著
●生命保險提要 大一冊版 正價五拾錢 郵稅六錢

市吉徹夫君著
●銀行と會社 中一冊版 正價廿五錢 郵稅廿四錢

土屋長吉君著
●商品と商業經營 中一冊版 正價廿五錢 郵稅廿六錢

土屋長吉君著
●最新販賣術 中一冊版 正價五拾錢 郵稅六拾錢

土屋長吉君著
●商業繁榮策 中一冊版 正價五拾錢 郵稅六錢

土屋長吉君著
●最新商業要綱 上製 八拾五錢郵稅七拾錢各八錢

土屋長吉君著
●簡易商業學 上下二冊 正價四拾錢 郵稅八錢

中野觀象君著
●最新外國商業地理 大版上製金文字入 正價五拾五錢 郵稅八錢

宮田千年君著
●世界商業史綱 大版上製金文字入 正價六拾錢 郵稅八錢

男爵後藤新平君序 四村正雄君著
●最新事務法 袖珍上製金文字入 正價六拾錢 郵稅六錢

商業學士小林行昌君 下平精一君共著
●英國商業實務 大版上製金文字入 正價壹圓廿錢 郵稅小包十二錢

實業之日本記者 都倉義一君著
●最新式記帳法 大一冊版 正價七拾錢 郵稅八錢

中野觀象君著
改良●單式簿記 大一冊版 正價廿四五錢 郵稅廿四五錢

千代田生命保險會社會計課長 奥石丑太郎君著
●利廻早見表 大一冊版 正價廿四五錢 郵稅廿四五錢

近江屋質店員 奥村喜一郎君著
●新撰實業讀本 和裝全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

五十嵐次郎君著
●最新商業算術 上製金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

四岡英夫君著
●商賈と勘定 中一冊版 正價四拾錢 郵稅八錢

中野觀象君 高岡昭君共著 新案
●商業書信活法 大一冊版 正價五拾錢 郵稅八錢

竹內正太郎君著
●商業簿記獨習書 全一冊 正價七拾錢 郵稅八錢

竹內正太郎君 村家玄君共著
●最新商業簿記 大一冊版 正價廿錢 郵稅六錢

市吉徹夫君著
●地理と商品 中一冊版 正價廿五錢 郵稅四錢

朝鮮日日新聞社著
●百四の小資本渡韓成功法 中一冊版 正價三十五錢 郵稅四錢

染谷克堂君著 成功秘訣
●富豪の面影 全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢

篠田鐵造君著
俗●小僧學問 袖珍 正價貳拾錢 郵稅四錢

四岡英夫君著
●立身と繁昌 中一冊版 正價廿五錢 郵稅四錢

在米 柿西藤一郎君著
●米國の商店 中一冊版 正價五拾錢 郵稅六錢

●修養書類

蘆川忠雄君著
●品性の勢力 大金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

米國前大統領ルーズヴエルト氏原著 山崎梅處君譯述
●ルーズヴエルト全集 大版上製金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

蘆川忠雄君著
●自助の精神 中一冊版 正價廿五錢 郵稅廿四錢

波多野烏峰君著
●新自助論 中一冊版 正價五拾錢 郵稅六錢

岡三慶君著 新編
●武士道實話 上製金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

波多野烏峰君著
●健全なる常識 大版上製金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

蘆川忠雄君著
●沈着心修養 中一冊版 正價廿五錢 郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●交際術修養 大一冊版 正價壹圓 郵稅八錢

樋口配天君著
●默想 中一冊版 正價廿五錢 郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●日常の言語 中一冊版 正價廿五錢 郵稅四錢

●奮闘の教訓　ルーズヴェルト氏著　山崎梅處　松宮宇一郎君共譯　大版　全一冊　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

●偉人修養の徑路　高須梅溪君著　袖珍上製　金文字入　正價五拾錢　郵稅六錢

●奮闘吐血錄　西宮敬次郎君著　中版　全一冊　正價六十錢　郵稅六錢

●意志の鍛錬　蘆川忠雄君著　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

●讀心術修養　蘆川忠雄君著　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

●克己心の修養　蘆川忠雄君　山崎清風君共著　大版上製　金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

●人格の光輝　江口岳東君著　大版　全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

●樂天の勝利　獨逸マイアー氏著　波多野烏峰君譯　大版　全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

●新時代の青年　實業之日本記者　岳淵生著（公開狀）　中版　全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

●教育勅語要義　文學博士井上哲次郎君校閲　植村道次郎君著　大版　美本　正價廿五錢　郵稅四錢

●快活なる精心　米國マーデン翁著　波多野烏峰君譯述　中版　全一冊　正價四拾錢　郵稅四錢

●人生の慰安　法學博士和田垣謙三君序　蘆川忠雄君著　大版　全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

●常識の修養　島田三郎君序　蘆川忠雄君著　大版　全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

●實務才幹訓練　男爵渋澤榮一君序　蘆川忠雄君著　大版　全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

●人生の奮闘　男爵前島密君序　蘆川忠雄君著　大版　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

●人生の妙味　英國男爵エーヴベリ卿　ラボック著　正木照藏君譯　大版上製　金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

●樂天の生活　伯爵大隈重信君序　蘆川忠雄君著　大版　全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

●品性の光輝　實業之日本記者　岳淵生著　中版　全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

●心機轉換法　蘆川忠雄君著　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

●不平慰安法　米國トマス、ウーチンゲ氏著　堀内新泉譯述　大版　全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

●觀察力修養　蘆川忠雄君著　中版　全一冊　正價卅五錢　郵稅四錢

●雄健の氣象　英國フキリス氏著　蘆川忠雄君譯述　中版　全一冊　正價四拾錢　郵稅四錢

●自彊術　堀内新泉君著　中版　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

●決斷力修養　蘆川忠雄君著　中版　全一冊　正價卅五錢　郵稅四錢

●勇者の世界　實業之日本臨時增刊　大版　全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢五厘

●人格の修養　實業之日本臨時增刊　大版　全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢五厘

●人格の鍛錬　蘆川忠雄君著　中版　全一冊　正價三十五錢　郵稅四錢

●商才修養の實驗　佛國大問屋主人ピエール著　前田越嶺君譯述　中版　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

●青年立身訓　野田吐鬼君著　成功實例　中版　全一冊　正價卅錢　郵稅四錢

●失敗の活用　蘆川忠雄君新著　中版　全一冊　正價三拾五錢　郵稅四錢

●自尊の修養　高橋男爵序　波多野烏峰君新著　實業青年　大版　全一冊　正價八拾錢　郵稅八錢

●座右銘全集　藤原尭水君編　先哲遺訓　中版　全一冊　正價八壹圓　郵稅壹錢

●新國民の修養　滝老名彈正君著　上製　金文字入　正價八壹圓　郵稅壹錢

●修養　農法學博士　新渡戸稻造君著　大版上製　箱入美本　正價壹圓七拾錢　郵稅拾貳錢

●獨立自尊　慶應義塾々長　鎌田榮吉君著　大版上製　箱入美本　正價壹圓七十錢　郵稅拾貳錢

●語學數學書類

●英語正確使用法　高橋五郎君著　上製　金文字入　正價六拾錢　郵稅六錢

●日清英會話　上海同文書院校友谷原學太郎君著　上製　紙函入　正價壹圓　郵稅八錢

●英語熟達法　高橋五郎君著　中版　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

●英語句讀法　高橋五郎君著　中版　全一冊　正價六拾錢　郵稅六錢

●代數難問詳解　米國理學士大木新三君　鈴木稻一君共著　新式　上製　金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

●實用珠算教科書　渡邊德兵衛君　小里運八君共著　大一册版　正價五拾錢　郵税八錢

●最新珠算全書　高岡、上田、中宮三君共著　大一册版　正價廿五錢　郵税六錢

●最新商業算術　五十嵐次郎君著　上金文字入製　正價八拾錢　郵税八錢

●和英俗語熟語故事大辭典　新渡戸、坪内、和田垣、三博士監修、實業之日本社編　大版上製　正價四圓五拾錢　箱入美本　郵税廿四錢

●婦人家庭書類

●花むすひ　京都師範學校教諭　木内菊次郎君著　大一册版　正價五拾錢　郵税六錢

●新案菓子製法　梅田燈葉君著　和洋折衷　大一册版　正價五拾錢　郵税八錢

●婦人のかがみ　報知新聞記者　中村木公君編　名流實話　大版上製　金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

●家庭應急手當法　醫師　武藤昇作著　中一册版　正價四拾錢　郵税六錢

●刺繍獨習法　實踐女學校講師　長谷川岩吉君述　大一册版　正價廿五錢　郵税六錢

●折紙と圖畫　京都師範學校教諭　水内菊次郎君著　大一册版　正價廿五錢　郵税六錢

●衣食住　山方香峰君著　日常生活　大版上製　金文字入　正價壹圓廿錢　郵税小包十二錢

●家庭菓子製法　梅田燈葉君著　全一册本　正價五拾錢　郵税六錢

●婦人の日常生活法　村井弦齋君著　特別上製壹圓廿錢　並製美本壹圓廿四錢　郵税拾貳錢　郵税八錢

●弦齋夫人の料理談　石塚月亭君編　第一編　第二編　第三編　二册　正價各壹錢　郵税八錢

●家庭理科　東京職工學校教諭　本間鶴治君著　通俗　大一册版　正價七拾錢　郵税八錢

●母の答　四谷龍顯君著　太郎の實問に　中一册版　正價廿錢　郵税四錢

●母の書簡　堀内新泉君著　娘に與へたる　前編四拾錢　後編五拾錢　郵税六錢　郵税八錢

●家庭日常の實驗　報知新聞記者　天野誠齋君編　大一册版　正價四拾錢　郵税六錢

●女子處生訓　米國女學記者ベエン氏著　實業之日本社譯解　三百五十餘頁　正價廿五錢　郵税六錢

●日本料理法　赤堀吉松、赤堀峰吉、赤堀菊子三君共著　大一册美本版　正價七拾錢　郵税八錢

●衣裳かがみ　婚人世界臨時增刊　菊全一册版　正價拾五錢　郵税壹錢五厘

●婦人の重寶　四谷龍顯君著　大一册版　正價五拾錢　郵税六錢

●最新育兒法　加藤醫學博士校閲　西谷龍顯君譯述　全一册美本　正價七拾錢　郵税六錢

●子供の研究　中島文學博士序　長野縣高等女學校長波多野市松君著　大版上製　金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

●健全なる家庭　三輪田眞佐子女史序　阿部長咲君著　中一册版　正價廿五錢　郵税廿四錢

●富豪の家風　實業之日本社編纂　全一册本　正價五拾錢　郵税六錢

●實用會計簿記　日本石油會社會計課長　竹田常治君著　大一册版　正價四拾錢　郵税六錢

●食物かがみ　婚人世界臨時增刊　菊全一册版　正價拾五錢　郵税壹錢五厘

●婦人の慰藉　婚人世界臨時增刊　菊全一册版　正價拾五錢　郵税壹錢五厘

●樂しき婦人　婚人世界臨時增刊　菊全一册版　正價拾五錢　郵税壹錢五厘

●圖畫應用紙細工　木内菊次郎君著　大一册版　正價五十錢　郵税八錢

●家庭實用衞生料理法　白井悅子女史著　大一册版　正價五拾錢　郵税八錢

●造花實習　松葉靜和女史著　大一册版　正價六拾錢　郵税八錢

●常識の養成　下田歌子女史著　婦人　大一册版　正價壹圓五十錢　郵税八錢

●諸流盆石指南　秤石齋文雅著　大一册版　正價六拾錢　郵税十二錢

●涙と鞭　讀賣新聞家庭記者　中村秋人君著　兒童教育　中一册版　正價參拾五錢　郵税四錢

●家事實習法　天野誠齋君著　大一册版　正價四拾錢　郵税六錢

●婦人の新修養　米國婦人ウキルコックス女史原著　山崎梅處君譯　大一册版　正價五拾錢　郵税八錢

●婦人及男子の參考　村井弦齋君著　大一册版　正價貳圓　郵税拾八錢

●最新手工科教授法　木内菊次郎君著　大二册版　正價廿五錢　郵税六錢

●家庭教育の仕方　文學士　堀田相甫君著　中一册版　正價廿六錢　郵税四錢

井上民子女史著
●烈婦美談 大和撫子 全一冊 版正 郵税 價四十五錢

村井弦齋君著
●小女讀本 全一冊 版正 郵税 價壹圓八錢

讀賣新聞家庭記者 中村秋人著
●幼兒保育 情と躾 全一冊 版正 郵税 價四拾錢

三浦木春影君譯
●島帝譚見 少年旅行 全一冊 版正 郵税 價四十錢

東京水川端龍子合作
●夏やすみ 全一冊 版正 郵税 價四十錢

村田天籟君著
●婦人の心理 全一冊 版正 郵税 價六十錢

下田歌子女史著
●婦人禮法 上製 大版 正價壹圓五十錢 郵税十二錢

恵邊白水君著
●少女美談 上製 並製 正價七十五錢 郵税各六十錢

富谷、鈴木、田中三君合著
●實用園藝全書 上製 正價貳圓 郵税十二錢

●處世書類

前田越嶺君著
●生存競爭法 大一冊 版正 郵税 價五拾錢

蘆川忠雄君著
●最良の機會 全一冊 版正 郵税 價廿五錢

園田學吉君序 波多野烏峯君著
●紳士と社交 上製 金文字入 郵税 價七拾錢

ジョンソン氏著 山崎梅處君譯述
●向上的處世法 大一冊 版正 郵税 價五拾錢

蘆川忠雄君著
●日常の言語 全一冊 版正 郵税 價廿五錢

ミラー博士著 波多野烏峯君譯述
●光輝ある生涯 全一冊 版正 郵税 價四拾錢

マシュース博士著 江口岳東君譯
●處世術修養 大一冊 版正 郵税 價壹圓貳十錢

蘆川忠雄君著
●樂天の生活 大一冊 版正 郵税 價五拾錢

實業之日本臨時增刊
●新時代の奮鬪 大一冊 版正 郵税 價廿貳錢

實業之日本臨時增刊
●樂天的處世法 大一冊 版正 郵税 價廿貳錢

實業之日本社編纂
●成功座右銘 袖珍美本 郵税 價拾六錢

男爵辻新次君序 波多野烏峯君著
●逆境離脱策 大版上製 金文字入 郵税 價壹錢

米國エゲストン氏著 蘆川忠雄君譯
●處世經濟法 全一冊 版正 郵税 價廿四錢

波多野烏峯君譯著
●處世の標準 全一冊 版正 郵税 價廿四錢

英國リッチー氏著 山崎梅處君譯
●富豪實驗教訓 大一冊 版正 郵税 價六拾錢

實業之日本臨時增刊
●同情の勢力 大一冊 版正 郵税 價廿貳錢

波多野烏峯君著
●社會側面觀 上製 金文字入 郵税 價七拾錢

實業之日本社編纂
●處世座右訓 袖珍美本 郵税 價貳拾錢

實業之日本社編纂
●成功錦囊 全一冊 版正 郵税 價廿錢

蘆川忠雄君著
●應對談話法 全一冊 版正 郵税 價廿五錢

ヒロー氏著 波多野烏峯君著
●表裏百面人生の眞相 全一冊 版正 郵税 價四拾錢

米國富豪ゲワハム翁書信 實業之日本社譯
●成功者の信條 處世教訓 全一冊 版正 郵税 價四拾錢

米國ジョン、ゲワハム翁著(右の原著)
●英文處世教訓 全一冊 版正 郵税 價廿五錢

實業之日本臨時增刊
●處生の金科玉條 全一冊 版正 郵税 價廿貳錢

河原智峡君新書 四冊 精選
●處生經典 袖珍上製 金文字入 郵税 價三拾六錢

●雜書類

大勳位伊藤公題字 大隈伯自序 江森泰吉君編
●大隈伯百話 大版上製 金文字入 正價貳圓八十錢 書留小包十八錢

米國エール大學教授哲學博士 朝河貫一君著
●日本の禍機 大一冊 版正 郵税 價五十錢

山崎梅處君譯述
●ルーズヴエルト全集 大版上製 金文字入 郵税 價壹圓

英國リチャードソン氏著 實業之日本社譯述
●最新讀書法 中一冊 版正 郵税 價四十錢

山方香峯君著
●讀書便覽 三六版 美本 郵税 價廿錢

實業之日本社編
●東西名士發奮の動機 上製 金文字入 郵税 價壹圓拾錢

佐藤青吟君著
●學生の前途 全一冊 版正 郵税 價廿五錢

大隈伯序 英人氣質 永井柳太郎君著
●思ひ出の記 全一冊 版正 郵税 價八十錢

●獨笑珍話　嬉遊生著　全一冊　珍　正價四拾錢　郵稅六錢

●都市の研究　伯爵大隈重信君島田三郎君序三宅鹽君著　上製　金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

●實用文字便覽　文學士　藤田篤君著　上製　袖珍　正價五拾五錢　郵稅六錢

●滑稽趣味の研究　高須梅溪君著　全一冊　中版　正價六拾錢　郵稅六錢

●優等學生勉强法　實業之日本社編　袖珍　本　正價廿錢　郵稅四錢

●西鄕南洲書翰集　加治木常樹君編　大版上製　金文字入　正價九拾錢　郵稅八錢

●作文書類

●文章大成　鶴岡天淵君著　大　製　正價壹圓　郵稅八錢

●書信文大成　鶴岡天淵君著　大　製　正價八十錢　郵稅八錢

●實用作文法　文學士　久保天隨君著　中　製　正價四十五錢　郵稅六錢

●書信文作法　文學士　久保天隨君著　中　製　正價四十五錢　郵稅六錢

●叙事文作法　文學士　久保天隨君著　中　製　正價四十五錢　郵稅六錢

●美文作法　文學士　久保天隨君著　中　製　正價四十五錢　郵稅六錢

●儀式文作法　文學士　久保天隨君著　中　製　正價四十四錢　郵稅六錢

●美辭寶鑑　實業之日本記者　藤原楚水君著　自在作文　袖　珍　製　正價七拾錢　郵稅八錢

●婦人消息文　鶴岡天淵君著　大　一冊　定價五十錢　郵稅八錢

●商業文練習帖　金澤商業學校長中野觀象君編　畠山觀成君著　和本習字用　手本　正價六十錢　郵稅四錢

●商業書信活法　中野觀象　高間昭君編著　大　一冊　正價五十錢　郵稅八錢

●商業書信文範　金澤商業學校長　中野觀象君著　大　一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

●英和商用文教科書　商學士　小林行昌君著　大版上製　金文字入　正價四十五錢　郵稅八錢

●新時代普通文　高須梅溪君著　中　一冊　正價五十錢　郵稅六錢

●最新刊書籍

●南米と南洋　讀賣新聞記者松川二郎君著　中　本　正價五十錢　郵稅六錢

●家庭書簡　手紙雜誌主幹　男女修養　桑田春風君著　中　一冊　正價七十錢　郵稅六錢

●青い鳥　東京毎日新聞記者　島田元慶君合作　中　製　正價廿錢　郵稅四錢

●千鳥濱　少女の友主筆　新體詩　口語詩　星野水裏君著　小　本　正價廿五錢　郵稅四錢

●烈婦の面影　文學士　岩佐白鷗君著　大　製　正價七拾錢　郵稅八錢

●新時代普通文　高須梅溪君著　中　一冊　正價五十錢　郵稅六錢

●俗語熟語故事大辭典　新渡戸、坪內、和田垣、三博士監修、實業之日本社編　和英　上製　大版　背皮　正價四圓五拾錢　郵稅十八錢

●江藤新平　報知新聞記者　曳島經巷君著　中　一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

●地方青年團體及事業　篠原蹄次君著　中　一冊　正價五十錢　郵稅六錢

●實踐會計整理法　土屋長吉君著　大　一冊　正價五十錢　郵稅八錢

●名士奇聞錄　嬉遊生著　三五　版　正價五十錢　郵稅六錢

●進歩と教育　日本女子大學長　成瀨仁蔵君著　大　製　正價七十錢　郵稅拾錢

●世渡の道　農法學博士　新渡戸稻造君著　大版上製　箱入美本　正價壹圓七十錢　郵稅十貳錢

●女子教育　文學博士　谷本富君著　大　製　正價壹圓　郵稅十二錢

●朝鮮　高濱虛子著　小　製

●琴歌詳解　井上民子女史著　流山田　中　本　正價五十錢　郵稅六錢

●合せ鏡（一名化粧法）　藤河英蓉著　小版　製　正價廿五錢　郵稅六錢

●經濟と人生　河上肇著　中　製　正價壹圓　郵稅八錢

●日本男兒　兒玉花外君著　英雄史詩　小　本　正價四十錢　郵稅四錢

●英語熟達ノート　實業之日本社編　ポケット　形　美本　正價五十錢　郵稅六錢

●最新賣出し法　品川卯一君著　袖　一冊　正價廿錢　郵稅四錢

●家庭新講談　細川風谷君著　大　本　正價廿五錢　郵稅六錢

●玄米應用手輕新料理　村井弦齋夫人述　石塚月亭君編　中　本　正價七十錢　郵稅八錢

●俗語熟語故事大典辭　新渡戸、坪內、和田垣、三博士監修、實業之日本社編　英和　中版　背皮　正價四圓五十錢　金字入箱入　小包料十八錢

●獨笑珍話　巖溢生著　袖珍　全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

●都市の研究　伯爵大隈重信君島田三郎君序三宅盤君著　文學士藤田篤君著　上製　金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

●實用文字便覽　高須梅溪君著　袖珍　上製　正價五拾五錢　郵稅六錢

●滑稽趣味の研究　寔樂之日本社編　全一冊　正價六拾錢　郵稅六錢

●優等學生勉强法　加治木常樹君編　袖珍　美本　正價廿錢　郵稅四錢

●西鄉南洲書翰集　大版上製　金文字入　正價九拾錢　郵稅八錢

●作文書類

●文章大成　鶴岡天淵君著　大版上製　正價壹圓四錢　郵稅八錢

●書信文大成　鶴岡天淵君著　大版上製　正價八十錢　郵稅八錢

●實用作文法　文學士久保天隨君著　中版上製　正價四十五錢　郵稅六錢

●書信文作法　文學士久保天隨君著　中版上製　正價四十五錢　郵稅六錢

●叙事文作法　文學士久保天隨君著　中版上製　正價四十五錢　郵稅六錢

●美文作法　文學士久保天隨君著　中版上製　正價四十五錢　郵稅六錢

●儀式文作法　文學士久保天隨君著　中版上製　正價四十四錢　郵稅六錢

●美辭寶鑑　寔樂之日本記者藤原楚水君著　自在文作　袖珍上製　正價七拾錢　郵稅八錢

●婦人消息文　鶴岡天淵君著　大版上製　定價五十錢　郵稅八錢

●商業文練習帖　金澤商業學校長中野觀象君編　寶用　高山觀成君著　和本習字本　正價六十錢　郵稅四錢

●商業書信活法　中野觀象　高間昭君編著　新案　大版上製　正價五十錢　郵稅八錢

●商業書信文範　金澤商業學校長中野觀象君著　寶用　大版上製　正價四拾錢　郵稅六錢

●英和商用文教科書　商學士小林行昌君著　大版上製　金文字入　正價四十五錢　郵稅八錢

●新時代普通文　高須梅溪君著　中版上製　正價五十錢　郵稅六錢

●最新刊書籍

●南米と南洋　讀賣新聞記者松川二郎君著　中版上製　正價五十錢　郵稅六錢

●家庭書簡　手紙雜誌主幹桑田春風君著　男女修養　中版上製　正價七十錢　郵稅六錢

●青い鳥　東京水島田元廣君合作　中版上製　正價廿錢　郵稅四錢

●千鳥　少女の友主筆口枡詩　新體詩　濱星野水裏君著　小版上製　正價廿五錢　郵稅四錢

●烈婦の面影　文學士岩佐白鷗君著　大版上製　正價七拾錢　郵稅八錢

●新時代普通文　高須梅溪君著　中版上製　正價五十錢　郵稅六錢

●俗語熟語故事大辭典　新渡戸、坪內、和田垣、三博士監修、寔樂之日本社編　和英　上製大版　正價四圓五拾錢　郵稅十八錢

●江藤新平　報知新聞記者鹿島櫻巷君著　中版上製　正價四拾錢　郵稅六錢

●地方青年團體及事業　篠原藤次君著　中版上製　正價五十錢　郵稅六錢

●實踐會計整理法　土屋長吉君著　大版上製　正價五十錢　郵稅八錢

●名士奇聞錄　堀澄生著　三五版上製　正價五十錢　郵稅六錢

●進歩と教育　日本女子大學長成瀨仁蔵君著　大版上製　正價七十錢　郵稅拾錢

●世渡の道　復法學博士新渡戸稻造君著　大版上製　正價壹圓七十錢　紙入美本　郵稅十貳錢

●女子教育　文學博士谷本富君著　大版上製　正價壹圓四錢　郵稅十二錢

●朝鮮　高濱虛子著　小說

●琴歌詳解　井上民子女史著　山田流　藤河英蓉著

●合せ鏡（一名化粧法）　小版上製　正價廿五錢　郵稅六錢

●經濟と人生　河上肇著　中版上製　正價壹圓　郵稅八錢

●日本男兒　英雄外史　兒玉花外君著　小版上製　正價四十錢　郵稅六錢

●英語熟達ノート　寔樂之日本社編　ポケット形美本　正價五十錢　郵稅六錢

●最新賣出し法　品川卯一君著　袖珍上製　正價廿錢　郵稅四錢

●家庭新講談　細川風谷君著　大版上製　正價廿五錢　郵稅六錢

●英和對譯歐米近代文藝美文抄　文學士津金澗村君著　目下印刷中

●玄米應用手輕新料理　村井弦齋夫人述　石塚月亭君編　中版上製　正價七十錢　美本　郵稅八錢

●俗語熟語故事大辭典　新渡戸、坪內、和田垣、三博士監修、寔樂之日本社編　英和　中版上製　正價四圓五十錢　金字入箱入　小包料十八錢

實業之日本社發行

五大雜誌!!

▲實業之日本
▲一冊拾壹錢郵稅一錢▲毎月二回一日十五日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共壹圓五十五錢▲一年分增刊共三圓▼

▲婦人世界
▲一冊拾五錢郵稅一錢五厘▲毎月一回一日發行▲半年分增刊郵稅共壹圓五錢▲一年分共二圓五錢▼

▲日本少年
▲一冊拾錢郵稅一錢▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同壹圓卅五錢▼

▲少女の友
▲一冊拾錢郵稅一錢▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同壹圓卅五錢▼

▲幼年の友
▲一冊拾錢郵稅五厘▲毎月二回一日發行▲六冊郵稅共五十八錢▲十二冊同壹圓拾錢▼

335
354

335
354

074540-000-2

335-354

山田流琴歌詳解

井上　民子／著

M45
CEI-1915

20.12.7.